

高崎市文化財調査報告書第 225 集

下佐野一本木遺跡

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2008

高崎市教育委員会

例 言

1. 本書は宅地造成に伴い実施された、「下佐野一本木遺跡」(高崎市遺跡番号 412) の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の所在は、群馬県高崎市内下佐野町 679 番地 1 他である。
3. 発掘調査は、平成 19 年 12 月 25 日より平成 20 年 2 月 1 日まで実施した。
4. 本調査及び整理作業は高崎市教育委員会が、委託契約を締結した株式会社シン技術コンサル前橋支店の協力を得て実施した。
5. 発掘調査の体制は下記のとおりである。

高崎市教育委員会 神戸聖語、田口一郎、斎藤寛方

株式会社シン技術コンサル前橋支店 調査担当 村上章義 事務担当 阿部福治

6. 本書の編集は、村上が行なった。執筆は I を斎藤、他を村上が行なった。
7. 本調査における図面・写真・遺物は、高崎市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査及び報告書作成に従事した作業員は、以下の通りである。(敬称略・五十音順)
岩本公則、小淵幸子、小暮利夫、島田 稔、清水夏子、住谷次雄、田口文雄、手塚 恵美子、長澤英雄、中島茂夫、中島嘉江、橋爪 太三郎、原沢 とし子、平井武弘、星野 恵美子、吉野賢次
9. 発掘調査の実施及び本書の刊行にあたり、下記の諸氏、諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。(敬称略・順不同)

株式会社歴史の杜、株式会社測研、須賀工業株式会社、有限会社渡重機工業、宮野環境設備株式会社、麻生敏隆、中沢 悟、上毎印刷株式会社、山際哲章

凡 例

1. 本書掲載の第 1 図は国土地理院発行 1/25,000 地形図「高崎」を、第 3 図は高崎市発行 1/2,500 「高崎市都市計画基本図」を、それぞれ使用した。
2. 遺構挿図の座標については、世界測地系(測地成果 2000)を使用した。図中に示した方位は、座標北である。
3. 土層および遺物の色調は、『新版標準土色帖』(農林水産庁農林水産技術会議事務局 監修、(財)日本色彩研究所 色票監修、2001 年版)による。
4. 本書における遺構種類の略号は、SI= 竪穴住居跡、SK= 土坑、SX= 石組遺構である。
5. 本書における火山噴出物の表記は、略号を用いた。浅間 - 板鼻褐色軽石 = As-BP、浅間 - 板鼻黄色軽石 = As-YP、浅間 B テフラ = As-B、浅間 A テフラ = As-A である。
6. 基本土層では、土壌学の累積土層(『土壌学と考古学』博友社、1987)と同様の考え方にたって、堆積層を大文字のローマ数字、土壌層位を大文字のアルファベットで続けて表現した。ローマ数字間は、層序関係が認められるが、アルファベット間には認められない。遺構覆土層では、上層から算用数字を付した。
7. 基本土層および遺構覆土の土層注記は、以下の書式である。

層番号 土色 色相 明度/彩度 粒径 土性 粘着性 可塑性 土壌硬度(ち密度)

混入物・備考

各用語は、土壌調査で用いられるものである。

8. 竪穴住居跡の四辺の方位は、下場に最も重なる直線の方位とし、主軸の方位は、基本的にカマドのある辺と直交する辺の方位とした。但し、カマドのある辺が極端に短い場合は、この限りではない。
9. 遺物観察表中の口径等の法量の数値の単位は「cm」である。瓦と石製品の項目では、色調・調整の外・内面は、それぞれ凸面・凹面、表面・側面とし、口径・底径・器高は、残存長・残存幅・厚さとする。
10. 遺構・遺物挿図において使用しているトーンの凡例は、以下の通りである。



灰



焼土



須恵器断面

Ⅲ. 遺跡の立地と環境

遺跡の位置と周辺の地形 本遺跡は、高崎市の南西部の下佐野町に所在し、高崎駅の南南西約3km、倉賀野駅の西南西約2.3kmに位置する。

遺跡は、粕沢川と烏川に挟まれた微高地上に立地する。微高地は、西を南流する烏川に沿って、北西から南東に向かってのびる。遺跡の周辺一帯は、前橋台地の一部である高崎台地と呼称される地形であり、原利根川の扇状地性堆積物の前橋砂礫層を基盤として、約2.1万年前に堆積した前橋泥流、約2万年前に降下したAs-BP、約1.3万年前に降下したAs-YP、約1.2万年前に堆積した高崎泥流などによって形成されたものである。遺跡のある微高地の西縁は、烏川による高崎台地の削剥によって急崖となっており、烏川以東は、河岸段丘上に立地する。この地形的条件によって、烏川の氾濫原からはずれたためか、遺跡のある微高地上は集落域として、遺跡の東を南流する粕沢川流域の低地帯は水田などの生産域として、利用されてきた。

参考文献 『新編高崎市史 通史編1』高崎市、2003

周辺の遺跡 本遺跡の周辺は、『上毛古墳総覧』に多数の古墳が記載されたように、古くから古墳群の存在する地域として知られていたが、上越新幹線の建設に伴う発掘調査によって、遺跡のある微高地上に、縄文時代、古墳時代から古代にかけての集落域が存在することが明らかとなった。また、東の低地帯では、条里水田やAs-B下水田が発見されている。以下、周辺の遺跡を本遺跡の時代以前を時代毎に概観する(第1図)。

旧石器時代の遺跡は、約1.2万年前に堆積した高崎泥流によって被覆されているためか、発見されていない。縄文時代の遺跡は、下佐野遺跡(3-5)において前期から後期の住居跡が18軒、倉賀野万福寺遺跡(9・10)では、中期後半の住居跡が3軒発見されている。弥生時代の遺跡は、発見されていない。古墳時代になると、微高地上に集落遺跡と古墳とが出現する。下佐野遺跡、倉賀野万福寺遺跡に加え、舟橋遺跡(7)、上佐野舟橋遺跡(8)、倉賀野宮之前遺跡(11)などであり、『上毛古墳総覧』に記載された漆山古墳(16)をはじめとする、妙音子山古墳(17)、天道山古墳(20)などの「佐野古墳群」である。さらに、微高地の東の粕沢川沿いには、大型前方後円墳の浅間山古墳(21)、大鶴巻古墳(22)、小鶴巻古墳(23)や、大山古墳(18)、庚申塚古墳(19)、安楽寺古墳(24)が存在する。本遺跡の周辺では、この時代の水田遺跡は発見されていない。奈良、平安時代では、下佐野遺跡の南部分に集落が縮小していたが、平安時代後半の9世紀になると、再び拡大が始まる。本遺跡もこ



の拡大によって成立したことが調査の結果、判明している。本遺跡の東を流れる粕沢川流域の平野部には、条里制水田とそれに連なる As-B 下水田が、倉賀野条里 I～V 遺跡 (12)、倉賀野続橋条里遺跡 (13)、倉賀野上新堀 I 遺跡 (14)、下之城村前遺跡 (15) などで見られている。

IV. 基本層序

本遺跡は、高崎泥流上に形成されたローム層を最下層とする。調査では、試掘調査の成果に基づき、I 層から VI B 層まで重機による除去を行なったため、I 層から VI B 層まで表土層として扱った。

I 層……試掘調査後の整地層。非常に軟らかい。

II 層……As-A 混土を主体とする現代耕作土。土質的には、III A 層と変わらないが、ビニール紐の切れ端などを混入する。現代の耕作によって、III A 層の上部を攪拌して生成されたと考えられる。

III A 層……いわゆる As-A 混土層である。天明三年 (1783) の As-A テフラ降下後に、下層の土と As-A テフラを攪拌して生成されたと考えられる。

III C 層……As-A 層の二次堆積層。As-A 処理坑に As-A テフラが埋設されたもの。As-A テフラの純層が残存せず、III A 層の母岩層であるため、基本層序の中に位置付けた。

IV 層……褐灰色シルト層。As-B 混土層が土壌化した層と思われたが、As-B 混土層との間に SK3、4 が認められることから、別個の堆積層として扱う。

V 層……As-B 混土層。天仁元年 (1108) の As-B テフラ降下後に、下層の土と As-B テフラを攪拌して生成されたと考えられる。As-B テフラの純層は残存せず。

VI A 層……As-B 降下以前の土壌層。VI B 層の土壌化層。

VI B 層……VI A 層の溶脱集積層。

VII 層……ローム漸移層。ローム層の土壌化層でもあるが、黒ボク土と同様に、層内に堆積層がある可能性があるため、別個の堆積層として扱う。

VIII 層……ローム層。

0	I	基本層序						
5	II	I 黒色	7.5Y2/1	砂質シルト	砂壤土 (SL)	弱	なし	しょう
10	III A	黄橙色 (10YR7/8) ロームブロック (φ 1.0-2.0cm) を数点含む。						
		II 黒色	7.5Y2/1	砂質シルト	砂壤土 (SL)	弱	なし	堅
		As-A 混土を主体とし、As-A 混土よりも色調が黒め。ビニール紐の欠片を含む。						
30	IV III C	III A 灰黄色	2.5Y6/2	砂質シルト	砂壤土 (SL)	弱	なし	堅
		同色の As-A パミスと思われる粒子 (φ 0.1-0.5cm) を 40-50% 含む。						
40	V	III C 淡黄色	2.5Y8/3	砂	砂土 (S)	なし	なし	なし
		As-A パミスから成る。As-A 混土がブロック状に混入する。						
55	VIA	IV 褐灰色	10YR4/1	シルト	砂壤土 (SL)	弱	弱	堅
65	VIB	V 黄灰色	2.5Y4/1	砂質シルト	砂壤土 (SL)	弱	なし	堅
		As-B パミスとみられる同色の粒子 (φ 0.1-0.5cm) を 50% 含む。						
80	VII	VIA 黒褐色	10YR3/1	シルト	壤土 (L)	弱	弱	堅
		VIB 灰黄褐色	10YR4/2	シルト	シルト質壤土 (SiL)	弱	中	軟～堅
		黄橙色 (10YR8/8) 粒子 (φ 0.05cm) を 1% 含む。						
90	VIII	VII 黒褐色～にぶい黄橙色	10YR3/1～10YR6/4	シルト	シルト質壤土 (SiL)	弱	中	軟～堅
		ローム粒 (φ 0.05cm) を 10% 含む。黒褐色 (10YR3/1) を粒子状に全体に 30-40% 含む。						
		VIII 黄色～黄橙色	2.5Y8/6～10YR7/8～8/6	粘土～シルト	シルト質壤土 (SiL)～埴土 (CL)	弱	中～強	堅

第 2 図 基本層序模式図

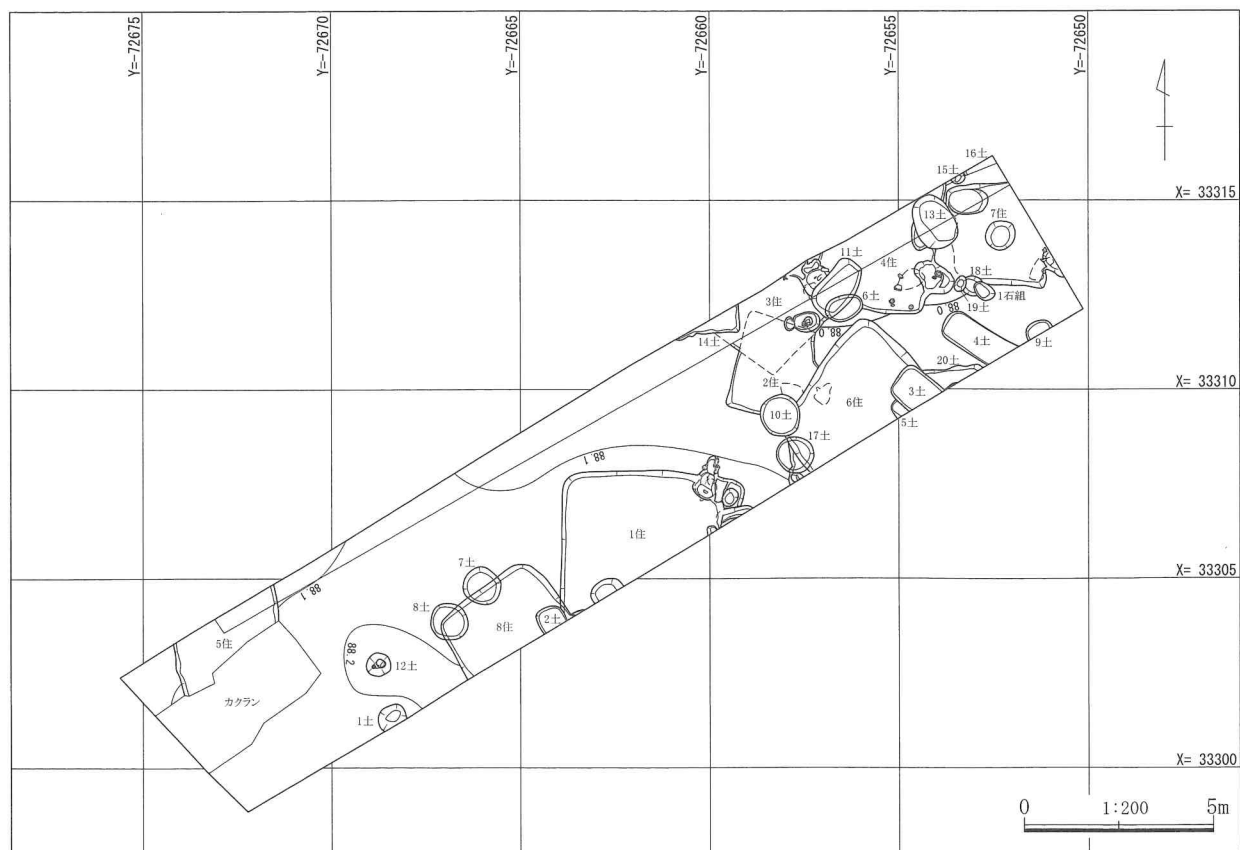
V. 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡 8 軒、石組遺構 1 基、土坑 20 基であった。

遺物は、竪穴住居跡からの出土を中心に、平安時代の土師器、須恵器、羽釜、瓦、磨り石、古墳時代の模倣杯、S字甕、円筒埴輪、その他に縄文土器、剥片、銅製品の小片等、破片数にして数百点が出土した。このうち、原位置ないしそれに準ずる位置で出土していると判断されたものと出土状況の良いものを中心に、各遺構の遺物の出土傾向を示すものを 50 点（うち写真のみ 3 点）掲載した。



第3図 調査区位置図



第4図 遺構配置図

1. 竪穴住居跡

1号住居跡 (SI1、第5-7図)

位置 座標 (X=33303、Y=-72659) と座標 (X=33309、Y=-72664) の間に位置する。

形態 主軸は西辺で残存長* 402.5cm、方位 N-1°-E。東辺が残存長 52.5cm、方位 N-17°-E。北辺が全長 461.0cm、方位 E-1°-S。南辺は調査区外にあり、規模・方位ともに不明である。平面形状は、南辺が調査区外のため断定できないが、東西に長い隅丸長方形を呈すると推定される。壁は上方が外に向かってやや開き、壁溝は検出されなかった。深さは 35～42cm。ローム層を掘り込んで作られており、掘り方がそのまま床面として利用されている。床面は全体的に硬化している。

施設 カマドは北辺の東隅寄りで検出された。燃焼部は奥行 67cm×最大幅 66cm×奥壁高 15cm で屋内に構築されている。支脚の抜取痕は認められなかった。西袖は残存せず、東袖は貯蔵穴の周堤を利用している。煙道部遺存長 48cm×最大幅 54cm。検出状況から、安山岩などを芯材としてローム混じりの粘土で構築され、住居廃絶時に人為的に破壊されたと考えられる。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、住居跡の北東隅に周堤をもつ楕円形の穴と、西南隅付近の床面に隅丸長方形のすり鉢状の落ち込みが検出され、それぞれ貯蔵穴 1、2 として取り扱った。また、住居跡の東辺沿いと、南西隅付近の SI8 のカマドの周囲において、床面よりも一段高い段差が認められた。

概要 SK2 に切られ、SI8 を切る。覆土は大きく二層に分かれる。上層の 1 層は基本土層の VI B 層に類似する。下層は色調と粒径から二層に細分されるが、VII 層に類似する。遺物は、1 層と 2 層の層理面を中心に 2、3 層から出土した。覆土の土層断面形状は、中央が低く周辺が高い、いわゆるレンズ状を呈しており、一見したところ自然堆積によるものと見られるが、2 層の上面の、SI8 のカマド付近において、SI8 のカマド由来と思われる焼土が認められたことから、2、3 層は住居の周堤を崩して埋め戻したものと考えたい。一方、1 層は、基本土層の VI B 層に類似する点や、完形ではないけれども一個体に復元された土師器甕 (No. 2) の破片に代表されるように、多くの遺物が 1 層と 2、3 層の層理面付近に集中することから、自然堆積によるものと考えたい。

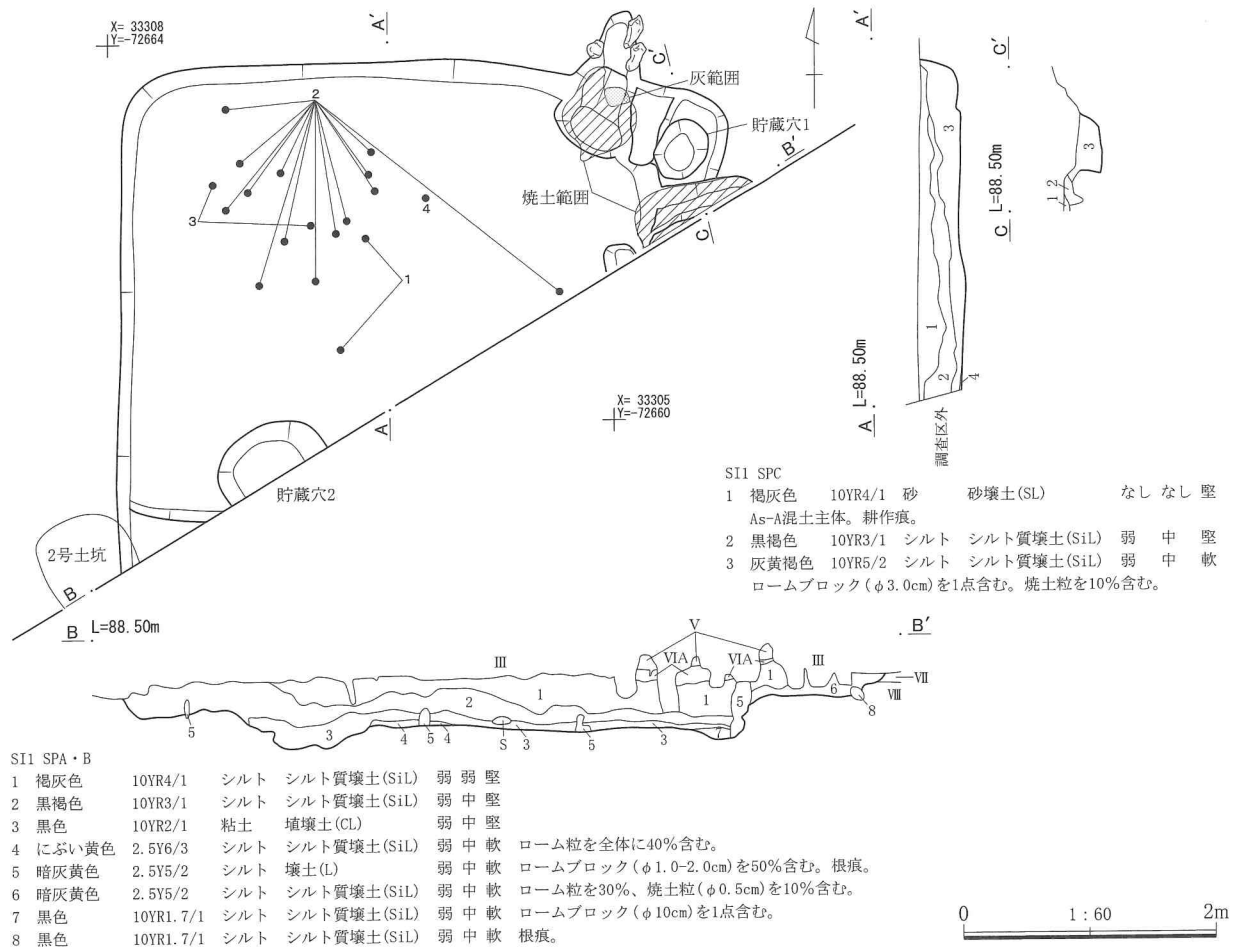
遺物 原位置と認められる遺物の出土はなかったが、カマド燃焼部底面の焼土より羽釜の口縁部片 (No. 5) が出土している。接合する遺物もなく、カマド部材に転用されたものと推定される。他に、土師器甕 (No. 2) の破片が散乱した状態で、土師質土器の足高高台埴 (No. 1・4)、土師器甕 (No. 3) が 1 層と 2、3 層との層理面に集中して出土している。これらは住居を埋め戻した後に捨てられたものと考えられる。覆土出土として、灰釉高台付皿 (No. 6)、布目丸瓦 (No. 7) がある。

時期 羽釜 (No. 5) から、下佐野遺跡 X 期 (10 世紀末頃)**相当。

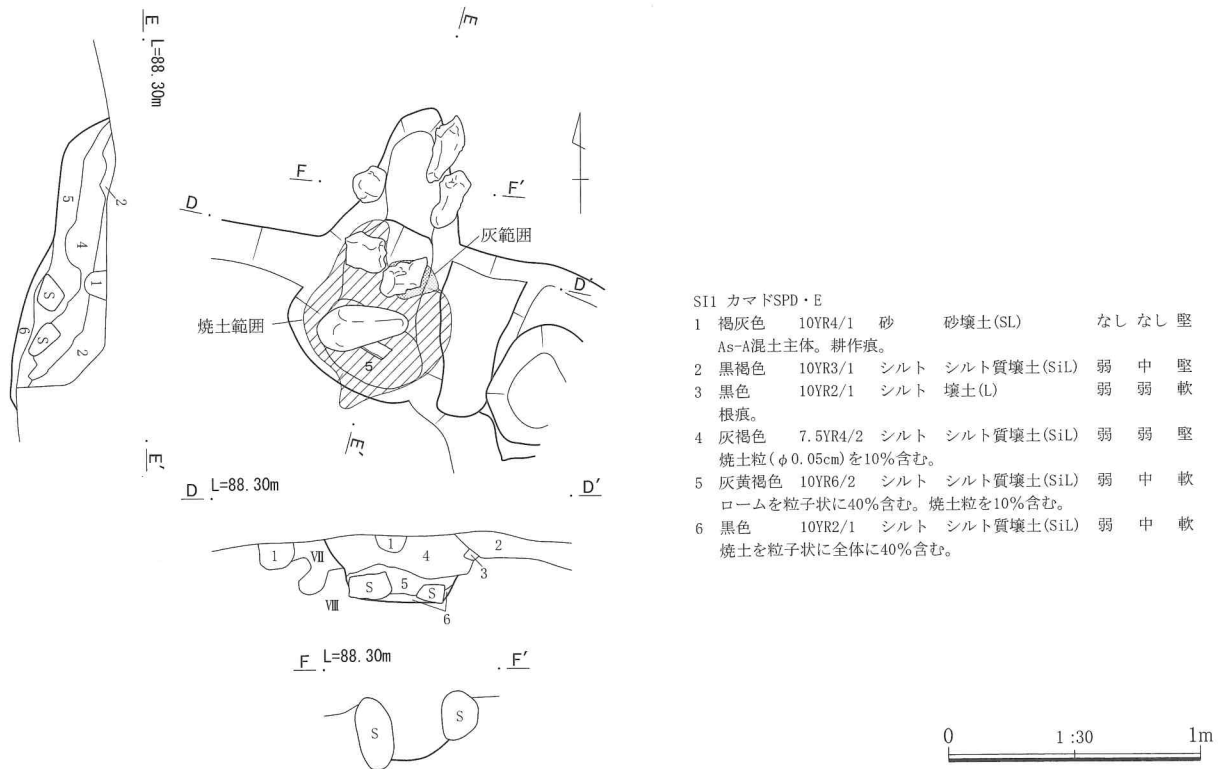
備考 貯蔵穴 1 は、位置、形状から貯蔵穴と判断したが、下部に南西方向に斜めに開く柱穴状の穴が存在するため、再検討する必要がある。東辺の貯蔵穴の南において焼土が確認された。焼土の西脇で川原石が立った状態で出土し、住居跡の外に焼土が広がっていたため、2 基めのカマドの可能性も考えられたが、焼土の大部分は調査区外に位置しているため、調査区内では、カマドと断定できるだけの証拠は得られなかった。床面直上から縄文土器片が出土しており、床面直上の出土が住居跡に伴うことの十分条件ではない一例であろう。

*竪穴住居跡の四辺の長さは、一方の隅の接点からもう一方の隅の接点までの距離である。隅の接点は、交差する辺に対し内角がそれぞれ 45° 以上の最小角度を有する接線が通る点であり、距離は、それぞれ辺を直線状に延長した線と隅の接点を通る線とが直交する点から点までの距離である。

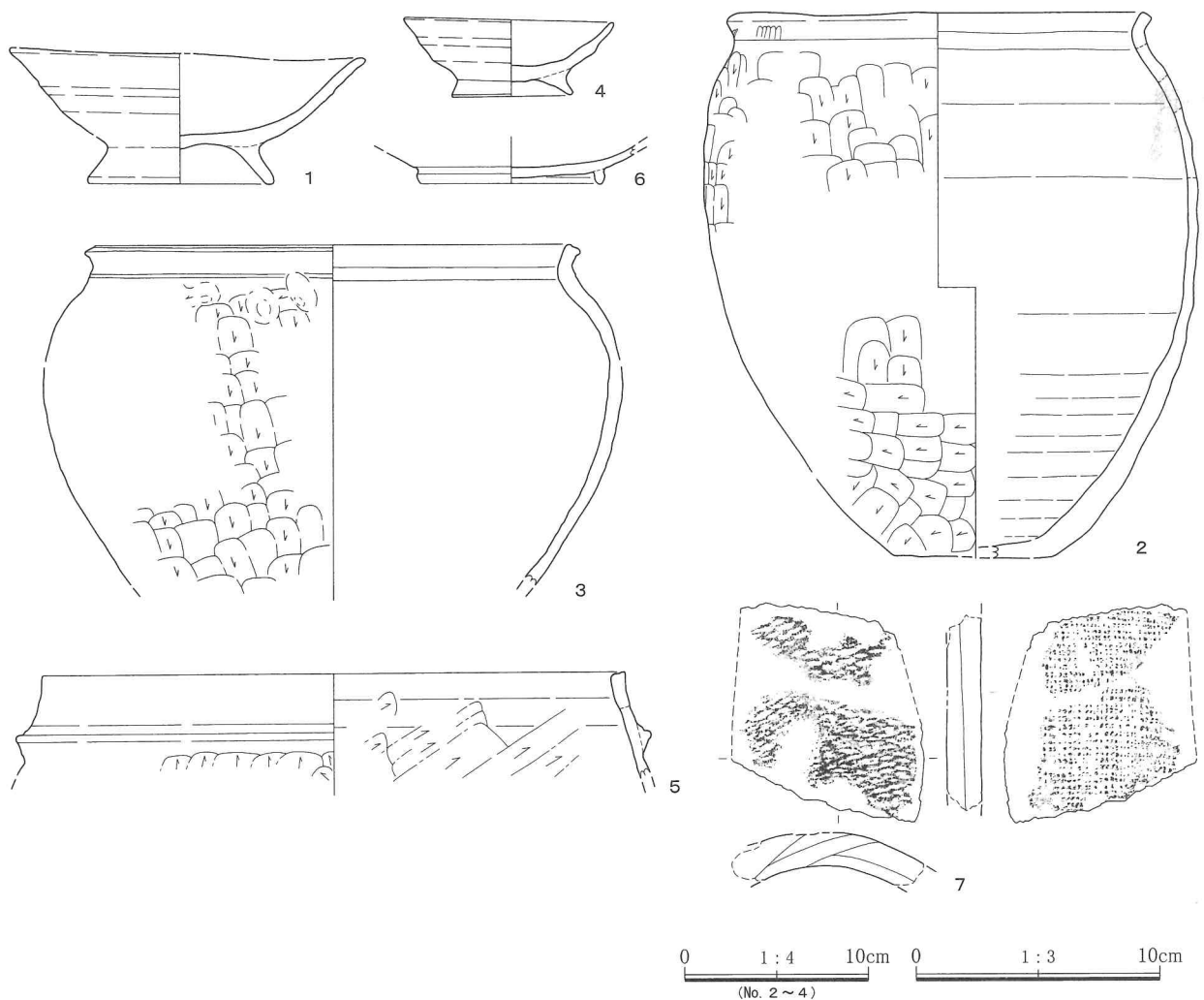
**下佐野遺跡 X 期は、『下佐野遺跡 I 地区・寺前地区 (3) 平安時代編』県埋文事業団、1989 に拠る。これは、後述の文章においても同様である。



第5図 SI1平・断面図



第6図 SI1カマド平・断面図



第7図 SI1遺物図

第1表 SI1 出土遺物観察表

No.	種別 器種	①口径 ③器高	②底径 ④残存	⑤焼成 ⑥成形	⑦色調（外面） ⑧色調（内面）	⑨外面調整 ⑩内面調整	備考
1	土師質土器 足高高台埴	① 14.25 ③ 5.4	② 7.3 ④ 口～台 2/3	⑤ 酸化 ⑥ 轆轤	⑦ 黄橙 10YR8/6 ⑧ 橙 7.5YR7/6	⑨ ロクロナデ。回転糸切り（右）。高台貼付。 ⑩ ロクロナデ。	
2	土師器 甕	① 23 ③ 29.8	② 8.4 ④ 口～底 2/3	⑤ 酸化 ⑥ 輪積	⑦ 黄橙 10YR7/6 ⑧ 鈍黄橙 10YR6/3	⑨ 口：ナデ。胴：ヘラ削り。 ⑩ ナデ。	
3	土師器 （台付？）甕	① 25.8 ③ 19.1	② ー ④ 口～胴 1/4	⑤ 酸化 ⑥ 輪積	⑦ 鈍黄橙 10YR7/3 ⑧ 鈍黄橙 10YR7/4	⑨ 口：ナデ。胴：指押ナデ。ヘラ削り。 ⑩ ナデ。	底部欠損。
4	土師質土器 足高高台埴	① 8.3 ③ 4.2	② 4.9 ④ 口～台 3/4	⑤ 酸化 ⑥ 轆轤	⑦ 鈍黄橙 10YR7/4 ⑧ 明黄褐 10YR7/6	⑨ ロクロナデ。回転糸切り（右）。高台貼付。 ⑩ ロクロナデ。	
5	土師質土器 羽釜	① 31.7 ③ 6.3	② ー ④ 口 1/8	⑤ 酸化 ⑥ 轆轤	⑦ 明赤褐 2.5YR5/8 ⑧ 明赤褐 2.5YR5/6	⑨ 鐙貼付。ロクロナデのちヘラ削り。 ⑩ ロクロナデのちヘラナデ。	
6	灰釉 高台付皿	① ー ③ 1.6	② 7.2 ④ 胴～台 2/3	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 鈍黄橙 10YR7/2 ⑧ 鈍黄橙 10YR7/2	⑨ ロクロナデ。高台貼付。施釉。 ⑩ ロクロナデ。施釉。	内面に重ね焼き痕あり。 SI1 覆土出土。
7	瓦 丸瓦	① 9 ③ 1.4	② 7.8 ④ ー	⑤ 還元 ⑥ 型起	⑦ 褐灰 10YR4/1 ⑧ 灰黄褐 10YR5/2	⑨ 斜格子叩き。 ⑩ 布目。	SI1 覆土出土。

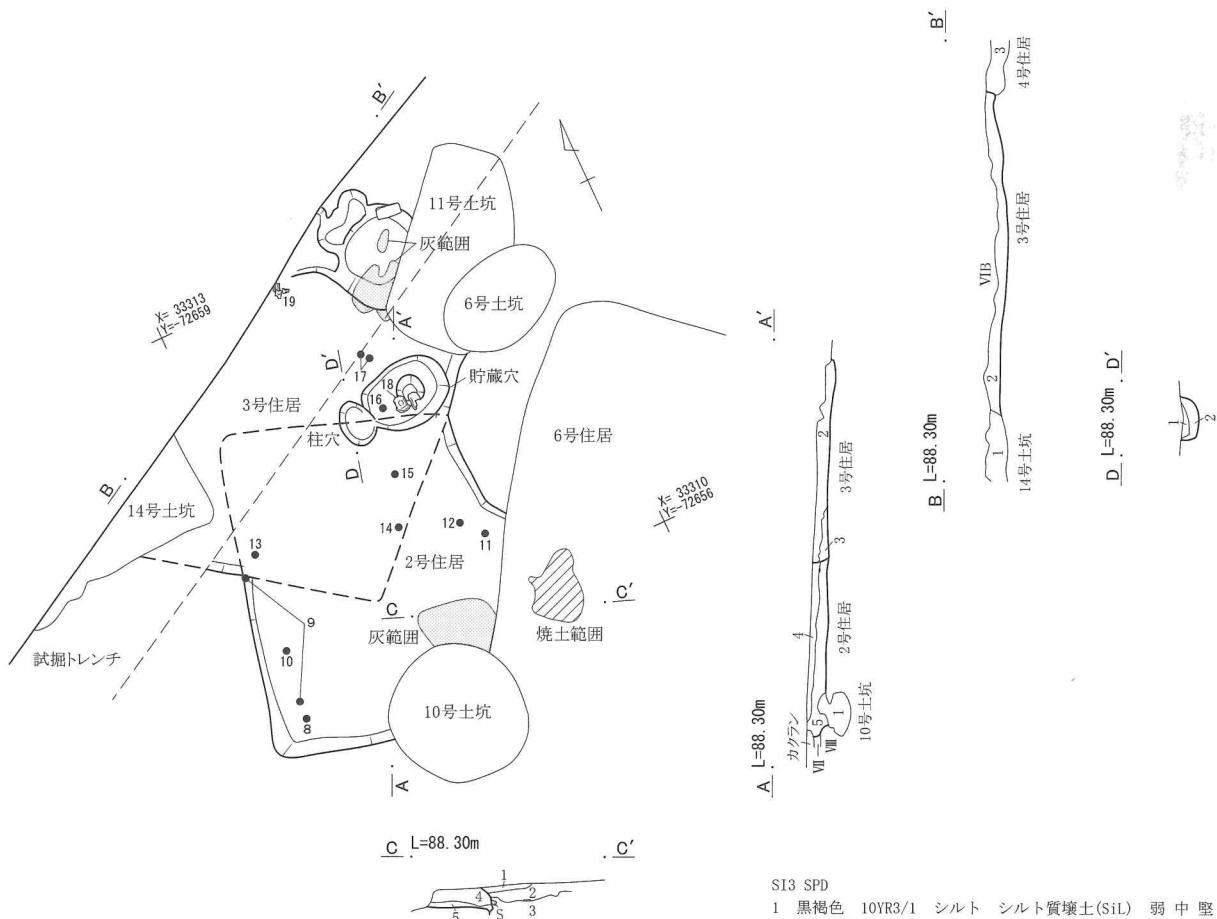
2号住居跡 (SI2、第8・10図)

- 位置 座標 (X=33309、Y=-72656) と座標 (X=33313、Y=-72660) の間に位置する。
- 形態 主軸は南辺で残存長 93.0cm、方位は E-18°-S。東辺が残存長 91.0cm、方位 N-6°-W。西辺が残存長 143.5cm、方位 N-12°-E。北辺は SI3 に切られており、残存していない。南北に長い隅丸長方形を呈す。壁は上方が外に向かってやや開いており、壁溝は検出されなかった。深さは 13～18cm。ローム層を掘り込んで作られており、掘り方がそのまま床面として利用されている。床面は全体的に硬化している。
- 施設 カマドは SI6 に切られており、残存していない。南東隅付近の床面において灰層を検出している。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。
- 概要 SI3・6、SK10 に切られる。覆土は二層に分かれるが、色調と混入物に僅かな違いが認められるだけで、いずれもⅦ層に類似する。遺物は両層からまんべんなく出土している。覆土の土層断面形状は、ほぼ平行であり、人為的な埋め戻しによるものと推定される。
- 遺物 原位置と認められる遺物の出土はなかったが、自然釉のかかった陶器の小型壺 (No. 12) の破片が、床面直上からまとまって出土した。他に羽釜 (No. 8・10・11)、丸瓦 (No. 9) が出土する。
- 時期 羽釜 (No. 8・10) から、下佐野遺跡Ⅶ期 (10 世紀前半*) 相当。
- 備考 SI3 との切り合い関係は、覆土層断面 SP.A の土層観察によるものである。いずれの住居跡も、深さが浅く、床面の標高もほぼ同じと、切り合い関係を示す明瞭な証拠はなかった。

* 下佐野遺跡ではⅦ期の年代は明示されていないが、Ⅵ期 (10 世紀初め) とⅦ期 (10 世紀中頃) から 10 世紀前半とする。

3号住居跡 (SI3、第8-10図)

- 位置 座標 (X=33310、Y=-72656) と座標 (X=33314、Y=-72660) の間に位置する。
- 形態 主軸は南東辺で残存長 52.5cm、方位 N-39°-E。北東辺は SK6・11 に切られ、調査区外にあるため、規模・方位ともに不明である。南西辺は SK14 と試掘トレンチに切られ、南東部を SI2 との切り合いから確認できなかったため、残存長 30.5cm、方位 E-34°-S。北西辺は調査区外にあり、規模・方位ともに不明である。平面形状は、北西辺が調査区外のため断定できないが、東西に長い隅丸長方形を呈すると推定される。壁は上方が外に向かってやや開き、壁溝は検出されなかった。深さは 5～16cm。ローム層を掘り込んで作られており、掘り方がそのまま床面として利用されている。床面は全体的に硬化している。
- 施設 カマドは北東辺の壁際で検出された。焼土を有する落ち込みで、燃烧部の底面と推定される。燃烧部は奥行 80cm × 最大幅 50cm × 奥壁高 6cm である。支脚の抜取痕は平面的には認められなかった。大部分が試掘トレンチと SK11 に切られており、遺存度は悪く、袖・煙道等は検出されなかった。燃烧部からカマド前の床面にかけて灰層が検出された。南東辺の際から遺物を包含する楕円形の穴が検出され、その脇より小穴が検出されたため、それぞれ貯蔵穴、柱穴として調査した。
- 概要 SK6・11・14 に切られ、SI2・4 を切る。覆土は二層に分かれるが、色調と混入物に僅かな違いが認められるだけで、いずれもⅦ層に類似する。遺物は両層からまんべんなく出土している。覆土の土層断面形状は、ほぼ平行であり、人為的な埋め戻しによるものと推定される。
- 遺物 明確に原位置と認定できないが、調査区北西壁際の床面直上において、土師器甕 (No. 19) が潰れたような状態で出土している。他に、貯蔵穴とカマドから須恵器の高台付碗 (No. 18・20) が出土しており、覆土中から足高台塼 (No. 13)、羽釜 (No. 15)、灰釉皿 (No. 16)、須恵器杯 (No. 17) が出土している。
- 時期 切り合い関係と遺物から、10 世紀ごろ (但し前半以降) と推定される。
- 備考 カマドの北西に焼土が検出され、トレンチをいれたが、別のカマド焼土かどうかは判明しなかった。床面直上出土の甕 (No. 19) は、推定される住居跡の年代とそぐわないため、検討の余地あり。



SI3 SPD

- 1 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
ローム粒を全体に1%含む。
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土 埴壤土(CL) 弱 中 軟
ローム粒を全体に30%含む。

SI2・3 SPA (1:SK10、2・3:SI3、4・5:SI2)

- 1 黄灰色 2.5Y5/1~4/1 砂質シルト 壤土(L) 弱 弱 軟
As-B混土主体。ローム(黄褐色 10YR8/6)ブロック(φ0.5-2.0cm)を10%含む。上から下に向かって漸移的に色調に黒味を呈する。
- 2 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
Ⅶ層土(にぶい黄褐色 10YR6/4)ブロック(φ0.5-1.0cm)を数点含む。炭化物粒を数点含む。
- 3 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
ローム(黄褐色 10YR8/6)ブロック(φ1.0-3.0cm)を30%含む。焼土粒を数点含む。
- 4 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
Ⅶ層土(にぶい黄褐色 10YR6/4)を粒子状に全体に30%含む。炭化物粒を数点含む。
- 5 黒色 10YR2/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
ローム(黄褐色 10YR8/6)ブロック(φ1.0cm)を南西部(壁際)に10%含む。Ⅶ層土(にぶい黄褐色 10YR6/4)を粒子状に全体に15%含む。

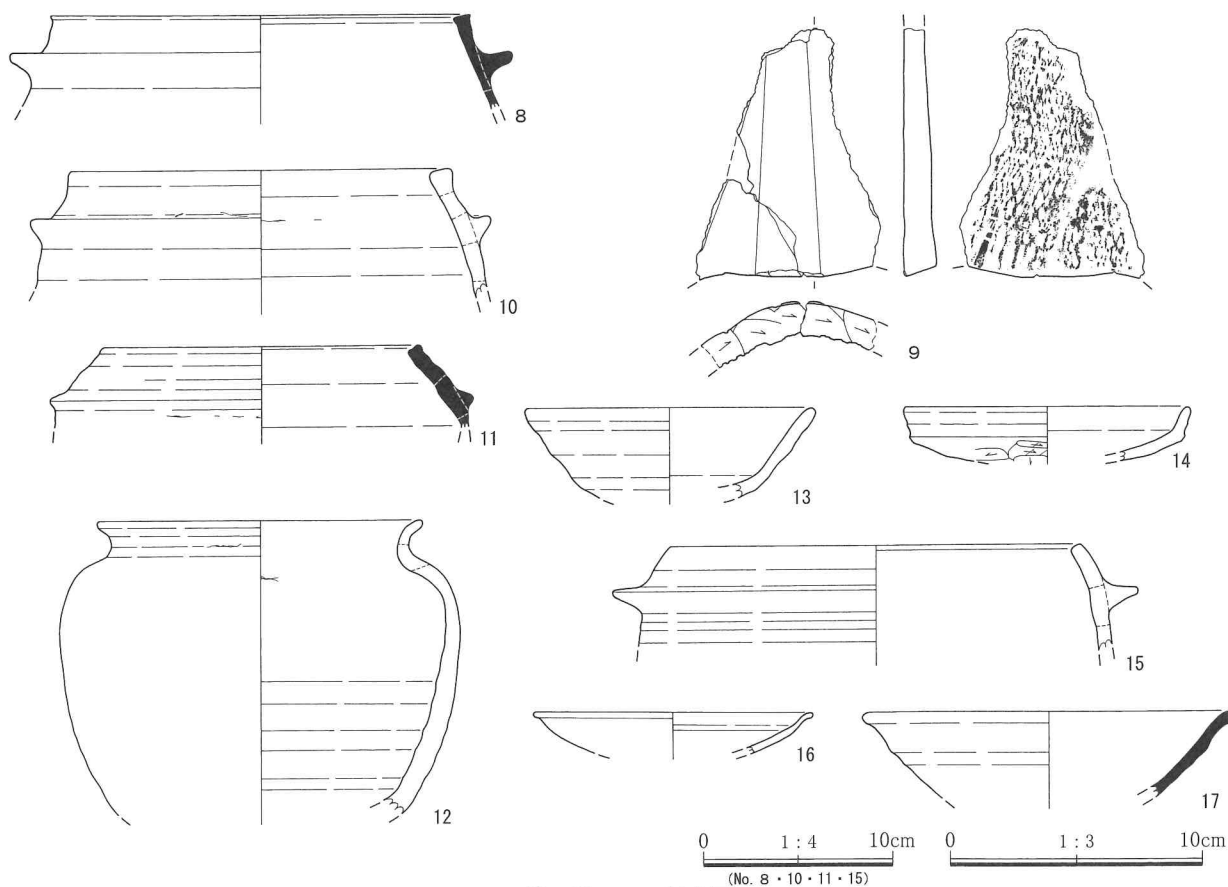
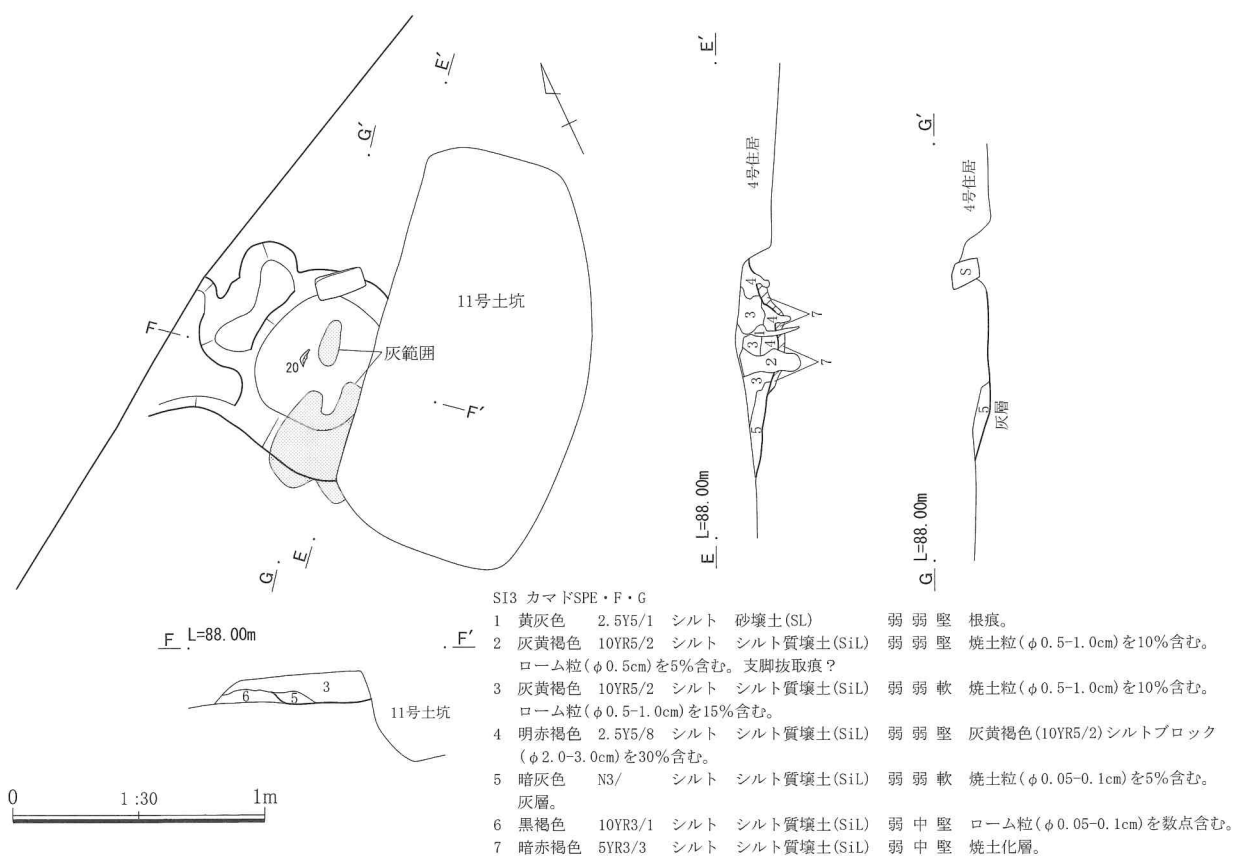
SI3 SPB

- 1 黒褐色 10YR3/2 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅 ロームブロック(φ1.0-3.0cm)を10%含む。炭化物粒(φ0.5cm)を1%含む。SK14覆土。
- 2 黒褐色 7.5YR2/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅 焼土粒(φ0.05cm以下)を全体に30%含む。北東部(カマド付近)にロームブロック(φ1.0-2.0cm)を数点含む。
- 3 黒褐色 10YR2/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅 ローム粒(φ0.05cm)を5%含む。SI4覆土。

SI2 SPC (1-3:SI6、4・5:SI2)

- 1 黄灰色 2.5Y4/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
焼土粒・炭化物粒(φ0.05-0.1cm)を1%含む。
- 2 淡黄色 2.5Y8/3 粘土 シルト質壤土(SiL) 中 中 堅
焼土ブロック(φ1.0-3.0cm)を30%含む。黒褐色(10YR3/1)シルトブロック(φ1.0-5.0cm)を2、3点含む。
- 3 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
焼土粒(φ0.5cm)を数点含む。淡黄色(2.5Y8/3)粘土ブロック(φ1.0-2.0cm)を2、3点含む。
- 4 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
焼土粒(φ0.1-0.5cm)を10%含む。ローム(黄褐色 10YR8/6)粒(φ1.0cm)を5%含む。炭化物粒(φ0.5cm)を2、3点含む。
- 5 暗灰色 N3/ シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
灰層。

第8図 SI2・3平・断面図





第10図 SI2・3遺物図

第2表 SI2・3 出土遺物観察表 (No. 8-12:SI2、No. 13-21:SI3)

No.	種別 器種	①口径 ③器高	②底径 ④残存	⑤焼成 ⑥成形	⑦色調(外面) ⑧色調(内面)	⑨外面調整 ⑩内面調整	備考
8	須恵器 羽釜	① 22 ③ 4.8	② — ④ 口 1/10	⑤ 酸化 ⑥ 轆轤	⑦ 灰黄褐 10YR5/2 ⑧ —	⑨ 唇・口：ヘラナデ。鏝貼付。ロクロナデ。スス付着。 ⑩ 口：ヘラナデ。口～：ヨコナデ。スス付着。	
9	瓦 丸瓦	① 9.8 ③ 1.25	② 7.3 ④ —	⑤ 還元 ⑥ 型起	⑦ 褐灰 10YR6/1 ⑧ 褐灰 10YR6/1	⑨ 凸：ヘラナデ。側：ヘラ削り。 ⑩ 布目。	
10	土師質土器 羽釜	① 19 ③ 6.8	② — ④ 口 1/4	⑤ 酸化 ⑥ 轆轤	⑦ 浅黄橙 7.5YR8/4 ⑧ 鈍橙 7.5YR7/4	⑨ ロクロナデ。鏝貼付。唇：ヘラナデ。 ⑩ ヨコナデ。黒斑。	
11	須恵器 羽釜	① 16.6 ③ 4.35	② — ④ 口 1/4	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 灰白 2.5Y8/2 ⑧ 灰白 2.5Y8/2	⑨ 唇・口：ヘラナデ。鏝貼付。ロクロナデ。 ⑩ ヨコナデ。	No. 33 に酷似。
12	陶器 壺	① 12.7 ③ 16	② — ④ 口～胴 1/6	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 灰白 N7/ ⑧ 灰白 N7/	⑨ ロクロナデ。肩：自然釉。 ⑩ ロクロナデ。下半：ヘラナデ。	
13	土師質土器 足高高台埴	① 11.2 ③ 3.55	② — ④ 口～胴 1/8	⑤ 酸化 ⑥ 轆轤	⑦ 鈍黄橙 10YR7/4 ⑧ 鈍黄橙 10YR7/2	⑨ ロクロナデ。 ⑩ ロクロナデ。	底部・高台欠損。
14	土師器 模倣杯	① 11.1 ③ 2.15	② 10.8 ④ 口～底 1/4	⑤ 酸化 ⑥ 型起	⑦ 鈍黄橙 10YR7/4 ⑧ 橙 7.5YR6/6	⑨ 上：ヘラナデ。下：ヘラ削り。 ⑩ ナデ。	
15	土師質土器 羽釜	① 43.6 ③ 4.6	② — ④ 口 1/5	⑤ 酸化 ⑥ 轆轤	⑦ 鈍黄橙 10YR7/3 ⑧ 鈍黄橙 10YR7/4	⑨ 唇：ヘラナデ。鏝貼付。ロクロナデ。鏝下：黒斑。 ⑩ ロクロナデ。	
16	灰釉 皿	① 10.9 ③ 1.6	② — ④ 口 1/8	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 灰白 2.5Y7/1 ⑧ 灰白 2.5Y7/1	⑨ ロクロナデのち施釉。 ⑩ ロクロナデのち施釉。	底部欠損。
17	須恵器 杯	① 14.2 ③ 3.4	② — ④ 口 1/4	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 灰黄 2.5Y7/2 ⑧ 灰黄 2.5Y7/2	⑨ ロクロナデ。 ⑩ ロクロナデ。黒斑。スス付着。	底部欠損。
18	須恵器 高台付碗	① 14.05 ③ 5.3	② 6.5 ④ 口～台 1/2	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 灰黄 2.5Y7/2 ⑧ 灰黄 2.5Y7/2	⑨ ロクロナデ。ヘラナデ。口：黒斑。高台貼付。 ⑩ ロクロナデ。底：強いヘラナデ。口：スス付着。	SI3 貯蔵穴出土。
19	土師器 甕	① 20.5 ③ 11.9	② 17.2 ④ 胴 1/8	⑤ 酸化 ⑥ 輪積	⑦ 橙 5YR6/6 ⑧ 明赤褐 2.5YR5/6	⑨ ヘラ削りのちナデ。 ⑩ ナデ。	上下不明。
20	須恵器 高台付碗	① — ③ 3.15	② 5.6 ④ 底 1/8	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 暗灰黄 2.5Y5/2 ⑧ 灰黄 2.5Y7/2	⑨ ヘラナデ。高台貼付。回転糸切り。 ⑩ ロクロナデ。底：ヘラナデ。	高台つぶれ。回転方向不明。SI3 カマド出土。
21	灰釉 碗	① 9.2 ③ 2.8	② — ④ 口 1/10	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 灰白 2.5Y7/1 ⑧ 灰白 2.5Y7/1	⑨ ロクロナデのち施釉。 ⑩ ロクロナデのち施釉。	底部欠損。 SI3 柱穴覆土出土。

4号住居跡 (SI4、第11-13図)

位置 座標 (X=33312、Y=-72653) と座標 (X=33316、Y=-72658) の間に位置する。

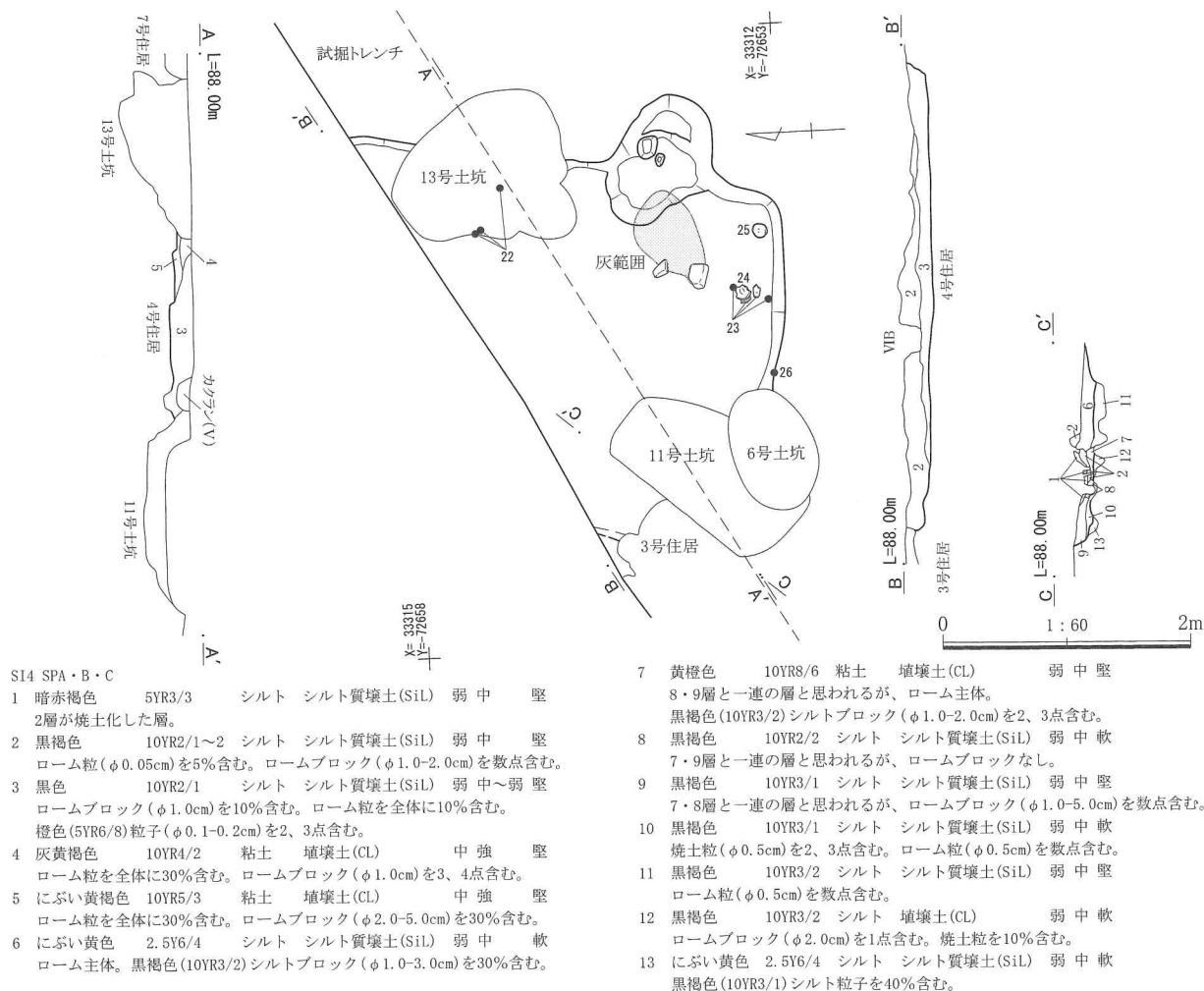
形態 主軸は南辺で残存長 154.5cm、方位は E-4°-S。東辺が残存長 344.5cm、方位 N-12°-E。西辺が SI3、SK6・11、試掘トレンチに切られ、北辺が調査区外にあって、規模・方位ともに不明である。平面形は、南北に長い隅丸長方形を呈すると推定される。壁は上方が外に向かってやや開き、壁溝は検出されなかった。深さは 13~21cm。ローム層を掘り込んで作られており、掘り方がそのまま床面として利用されている。床面は全体的に硬化している。

施設 カマドは東辺の南東隅寄りで検出された。燃焼部は奥行 80cm×最大幅 83cm×奥壁高 6cm で壁を半分ほど掘り込んで構築されている。支脚の抜取痕が認められた。袖は認められなかった。燃焼部の手前の床面に灰層が認められた。煙道部遺存長 31cm×最大幅 68cm。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

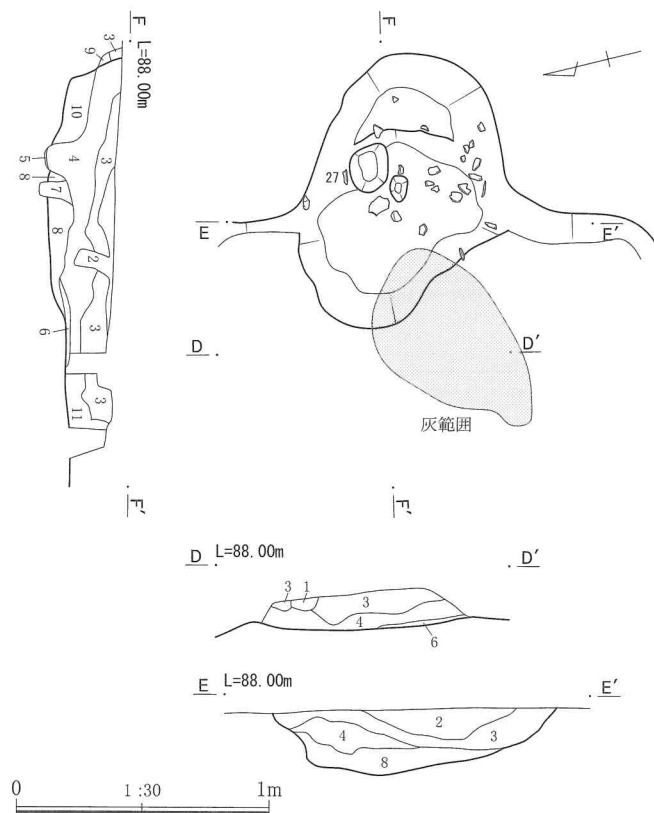
概要 SI3、SK6・11・13 に切られる。覆土は大きく二層に分かれるが、色調と混入物に僅かな違いが認められるだけで、いずれも VII 層に類似する。遺物は、主に 3 層からの出土であるが、2 層残存部分は、試掘トレンチに切られていたため、遺物の包含は不明である。覆土の土層断面形状は、ほぼ平行であり、人為的な埋め戻しによるものと推定される。

遺物 明確に原位置と認定できないが、南壁際において、須恵器の杯・碗類 (No. 23-25) と磨り石 (No. 26) が崩れ落ちたような状況で出土しており、カマドでは、コの字形口縁の甕 (No. 27) が潰れたような状況で出土している。

時期 須恵器の杯・碗類 (No. 23-25) と甕 (No. 27) から、下佐野遺跡 V 期 (9 世紀後半) 相当。



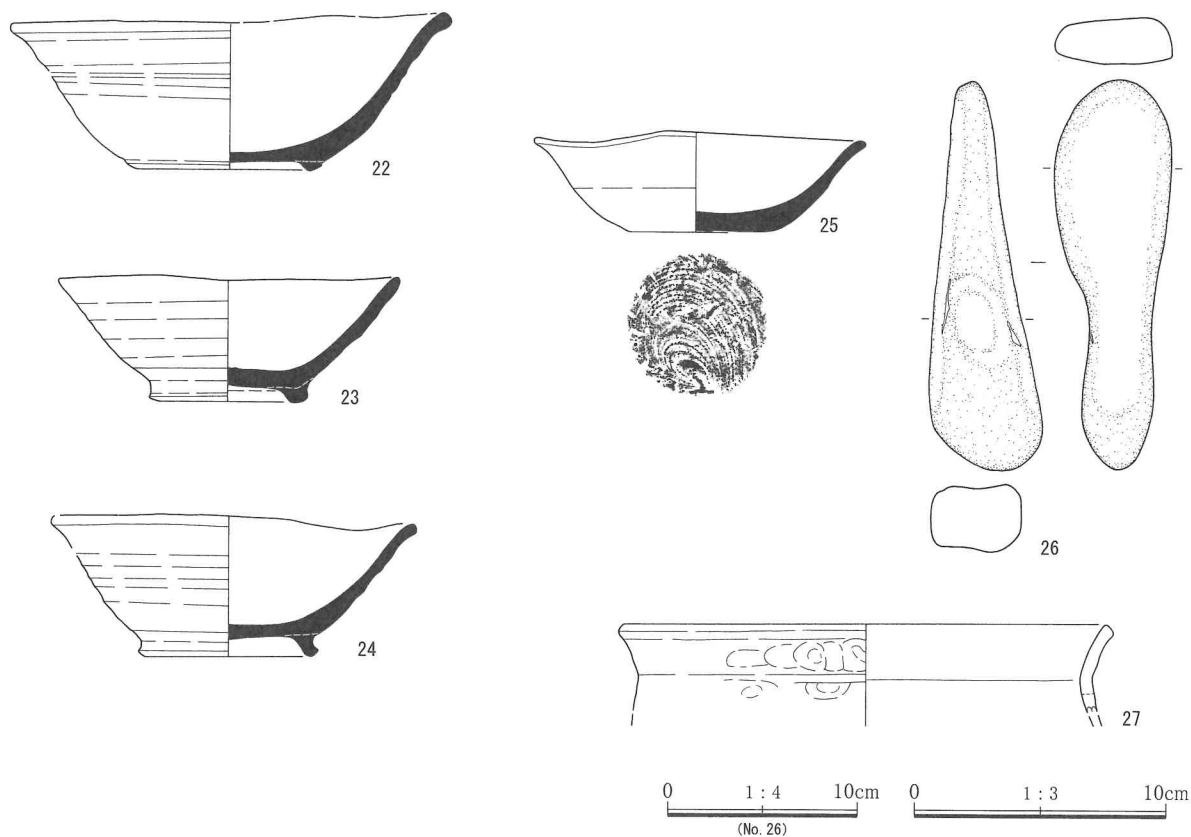
第11図 SI4平・断面図



SI4 カマドSPD・E・F

- | | | | | | | | |
|--|--------|---------|-----|-------------|---|---|---|
| 1 | 褐灰色 | 10YR4/1 | シルト | シルト質壤土(SiL) | 弱 | 弱 | 堅 |
| 2 | 褐灰色 | 10YR4/1 | シルト | シルト質壤土(SiL) | 弱 | 弱 | 堅 |
| 3 | 黄橙色 | 10YR7/8 | 粘土 | 埴壤土(CL) | 弱 | 中 | 堅 |
| ローム主体。焼土ブロック(φ2.0-5.0cm)を20%含む。 | | | | | | | |
| 4層土(黒褐色 10YR3/2)ブロック(φ3.0-4.0cm)を15%含む。 | | | | | | | |
| 4 | 黒褐色 | 10YR3/2 | シルト | 埴壤土(CL) | 弱 | 中 | 堅 |
| 焼土粒を30%含む。ローム粒を10%含む。 | | | | | | | |
| 5 | 黒色 | 10YR2/1 | シルト | 埴壤土(CL) | 弱 | 中 | 軟 |
| 黒褐色(10YR3/2)土粒を30%含む。 | | | | | | | |
| 6 | 暗灰色 | N3/ | シルト | シルト質壤土(SiL) | 弱 | 弱 | 軟 |
| 焼土粒を1%含む。灰層。 | | | | | | | |
| 7 | 黒褐色 | 10YR3/2 | シルト | 埴壤土(CL) | 弱 | 中 | 軟 |
| ローム粒を2、3点含む。支脚抜取痕。 | | | | | | | |
| 8 | 黒褐色 | 5YR3/1 | シルト | 埴壤土(CL) | 弱 | 中 | 軟 |
| 焼土粒を40%含む。ローム粒を5%含む。 | | | | | | | |
| 9 | 黒褐色 | 10YR3/2 | シルト | シルト質壤土(SiL) | 弱 | 中 | 軟 |
| 焼土粒(φ0.01cm以下)・ローム粒(φ0.5-1.0cm)を30%含む。 | | | | | | | |
| 10 | にぶい赤褐色 | 5YR4/3 | シルト | シルト質壤土(SiL) | 弱 | 中 | 堅 |
| 焼土粒を全体に40%含む。黒色(10YR2/1)土ブロック(φ2.0cm)を2、3点含む。灰粒子をブロック状に15%含む。上層理面に灰層をもつ。 | | | | | | | |
| 11 | 黒色 | 10YR2/1 | シルト | シルト質壤土(SiL) | 弱 | 中 | 堅 |

第12図 SI4カマド平・断面図



第13図 SI4遺物図

第3表 SI4 出土遺物観察表

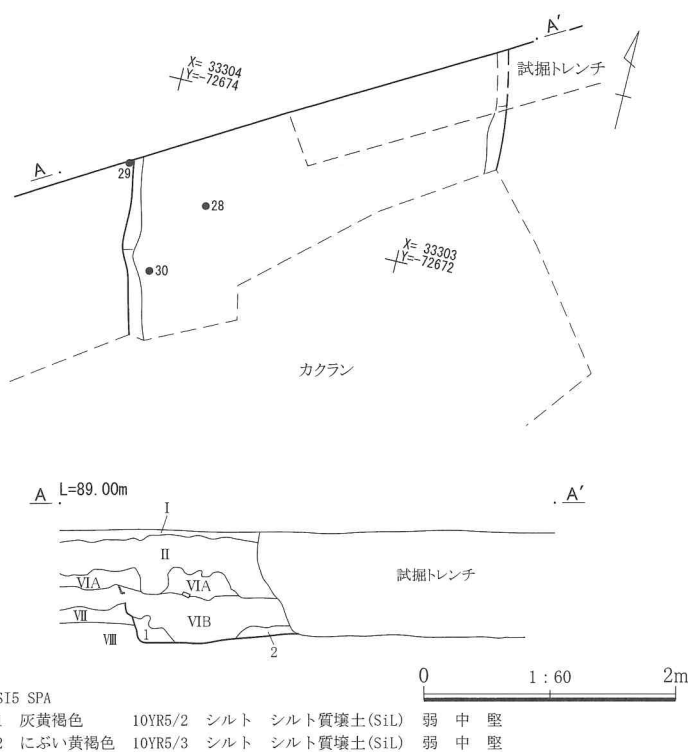
No.	種別 器種	①口径 ③器高	②底径 ④残存	⑤焼成 ⑥成形	⑦色調（外面） ⑧色調（内面）	⑨外面調整 ⑩内面調整	備考
22	須恵器 高台付碗	① 17 ③ 6.05	② 6.8 ④ 口～底 1/2	⑤還元 ⑥轆轤	⑦灰黄褐 10YR6/2 ⑧灰白 2.5Y7/1	⑨ロクロナデ。上半：ヘラナデ。回転系切り。 高台貼付。 ⑩ロクロナデ。黒斑。	回転方向不明。
23	須恵器 高台付碗	① 13.2 ③ 5	② 5.6 ④ 口～底 3/4	⑤還元 ⑥轆轤	⑦灰白 2.5Y7/1 ⑧灰白 2.5Y7/1	⑨ロクロナデ。上半：ヘラナデ。高台貼付。黒斑。 ⑩ロクロナデ。黒斑。	
24	須恵器 高台付碗	① 14.2 ③ 5.6	② 6.6 ④ 口～底 2/3	⑤還元 ⑥轆轤	⑦灰黄 2.5Y6/1 ⑧灰黄 2.5Y6/1	⑨ロクロナデ。上半：ヘラナデ。回転系切り（右）。 高台貼付。 ⑩ロクロナデ。	
25	須恵器 杯	① 12.9 ③ 3.95	② 5.1 ④ 完形 1/1	⑤還元 ⑥轆轤	⑦灰 5Y6/1 ⑧灰 5Y6/1	⑨ロクロナデ。上半：ヘラナデ。回転系切り（右）。 ⑩ロクロナデ。	
26	石製品 磨り石	① 20.7 ③ 3.6	② 6.2 ④ 完形 1/1	— —	灰黄 2.5Y6/1	⑨扁平磨り面。 ⑩磨り凹み。	同型の磨り石 (No. 50) あり。
27	土師器 コの字甕	① 18.95 ③ 3.4	②— ④ 口 1/8	⑤酸化 ⑥輪積	⑦灰褐 5YR4/2 ⑧鈍赤褐 5YR4/3	⑨ヨコナデのち指押さえナデ。 ⑩ナデ。	カマド出土。直接接合しない 胴部片多数。

5号住居跡（SI5、第14・15図）

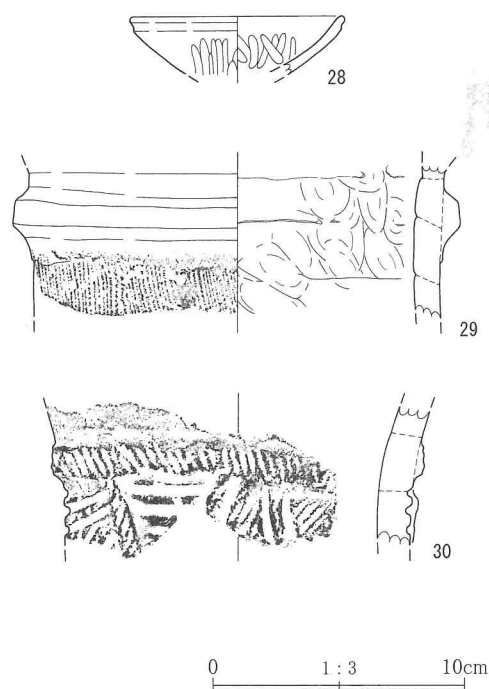
- 位置 座標 (X=33301、Y=-72671) と座標 (X=33306、Y=-72675) の間に位置する。
- 形態 主軸は基準となるカマドや炉が未検出のため不明である。北東辺が残存長 44.0cm、方位 N-12°-W。南西辺が残存長 139.0cm、方位は N-14°-W。北西辺は調査区外にあり、南東辺は攪乱に切られているため、規模・方位ともに不明である。平面形状は不明。壁は上方が外に向かってやや開き、壁溝は検出されなかった。深さは 7～22cm。ローム層を掘り込んで作られており、掘り方がそのまま床面として利用されている。床面は全く硬化していない。
- 施設 カマドもしくは炉、柱穴、貯蔵穴等全ての施設が検出されず、有無も不明。
- 概要 北西部が調査区外、北東部が試掘トレンチに切られ、南西部が攪乱に切られているため、遺存状況が悪い。遺構確認時、埴輪・土師器が出土し、二辺が並行し、攪乱に切られた土層断面上に平坦面が認められたことから、住居跡と認定した。覆土層の大半が VI B 層であり、遺物も大半が縄文土器片（勝坂、加曾利 E 等中期）と埴輪片であることから、住居跡ではない可能性がある。
- 遺物 原位置と認められる遺物の出土はなく、遺物も縄文土器片と埴輪片が大半を占める。いずれもほとんど接合しない。
- 時期 覆土と遺物から古墳時代と推定される。
- 備考 断面図から深さは 60cm 以上と推定される。埴輪片が多く出土していることから、古墳の周溝の可能性はある。

第4表 SI5 出土遺物観察表

No.	種別 器種	①口径 ③器高	②底径 ④残存	⑤焼成 ⑥成形	⑦色調（外面） ⑧色調（内面）	⑨外面調整 ⑩内面調整	備考
28	土師器 高杯	① 8.2 ③ 2.3	②— ④ 口 1/8	⑤酸化 ⑥轆轤	⑦浅黄橙 10YR8/4 ⑧鈍橙 7.5YR7/4	⑨口：ロクロナデ。下半：ミガキ。 ⑩口：ロクロナデ。下半：ミガキ。	底部・脚部欠損。
29	埴輪 円筒埴輪	① 16.5 ③ 6	② 16.1 ④ 胴 1/8	⑤酸化 ⑥輪積	⑦淡黄 2.5Y8/3 ⑧浅黄橙 10YR8/3	⑨タガ貼付。タガ下：刷毛目。 ⑩指押さえ。	直接接合しない破片多数。
30	縄文土器 深鉢	① 15.2 ③ 5.5	② 13.7 ④ 肩 1/4	⑤酸化 ⑥輪積	⑦鈍黄褐 10YR4/3 ⑧鈍黄褐 10YR4/3	⑨無文帯。（横・下垂）隆帯上縄文。 斜行沈線または縄文。 ⑩強いナデ。	勝坂。



第14図 SI5平・断面図



第15図 SI5遺物図

6号住居跡 (SI6、第16・17図)

位置 座標 (X=33306, Y=-72653) と座標 (X=33312, Y=-72658) の間に位置する。

形態 主軸は北西辺で、残存長 273.5cm、方位 N-42°-E。北東辺が残存長 226.0cm、方位 N-43°-W。南西辺が残存長 115.5cm、方位 N-35°-W。南東辺は調査区外にあり、規模・方位ともに不明である。平面形状は、南東辺が調査区外のため断定できないが、東西に長い隅丸長方形を呈すると推定される。壁は上方が外に向かってやや開き、壁溝は検出されなかった。深さは 19 ~ 38cm。ローム層を掘り込んで作られており、掘り方がそのまま床面として利用されている。床面は全体的に硬化している。

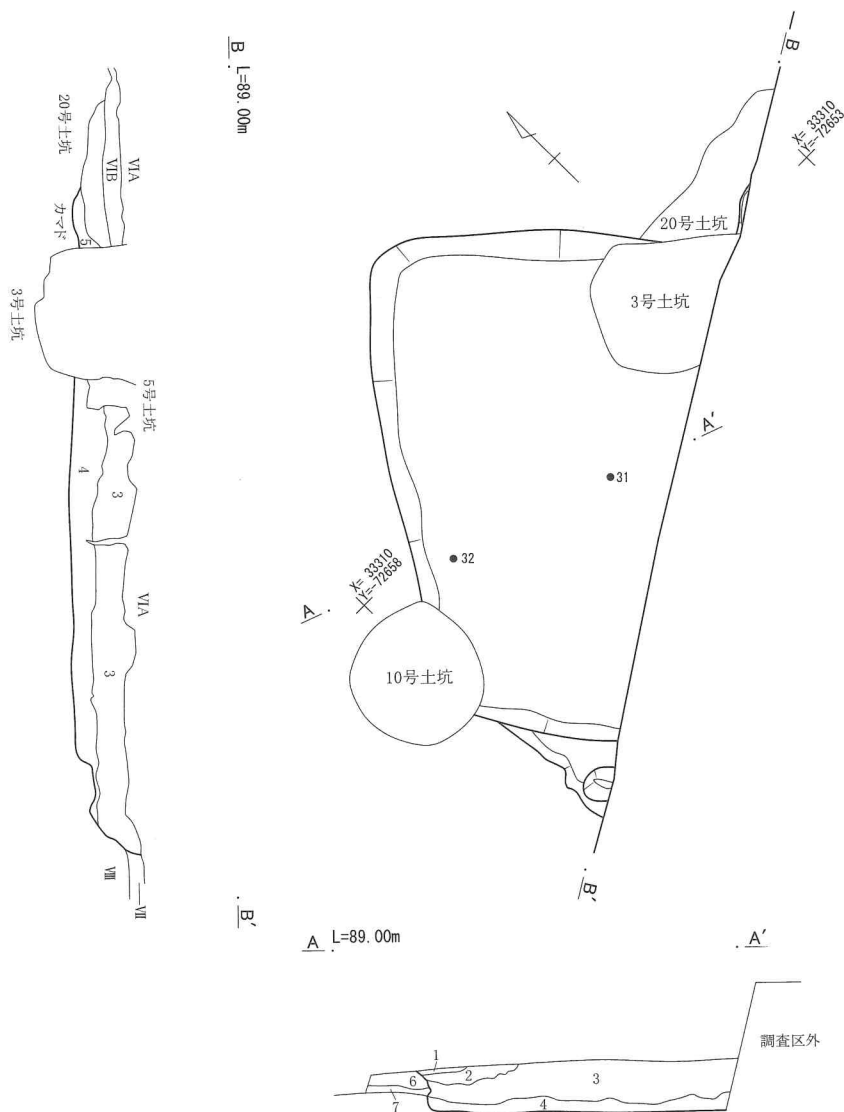
施設 カマドは北東辺の壁際で検出された。焼土を有する落ち込みで、標高から燃烧部の一部と推定される。大部分が調査区外であり、SK3・20 に切られているため、遺存度は悪く、袖・煙道等は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。南西辺の外側にテラス状の段差が検出された。

概要 SK3・5・10・17・20 に切られ、SI2 を切る。覆土は大きく二層に分かれる。上層の3層は基本土層のVIB層に類似する。下層の4層は、ローム混じりではあるが、VII層に類似する。遺物は、3層と4層の層理面を中心に両層から出土した。覆土の土層断面形状は、ほぼ平行であり、人為的な埋め戻しによるものと推定される。SI1 同様、3層の上面の、SI2 のカマド付近において、SI2 のカマド由来と思われる。焼土と粘土 (第8図) が認められたことから、覆土層は住居の周堤を崩して埋め戻したものと考えたい。

遺物 長胴甕 (No. 31)、模倣杯 (No. 35-38)、杯蓋 (No. 39) と古墳時代の土器が比較的多く出土するが、一方で羽釜 (No. 32-33) も出土している。

時期 羽釜 (No. 32) から、下佐野遺跡VII期 (10世紀前半) 相当。

備考 南西辺外のテラス面のレベル、覆土3、4層の層理面において、テラスの西辺と直交する形で三角形に硬化面が認められたため、テラスはSI6とは異なる住居跡の一部の可能性はある。但し、覆土層断面において壁等は認められなかった。

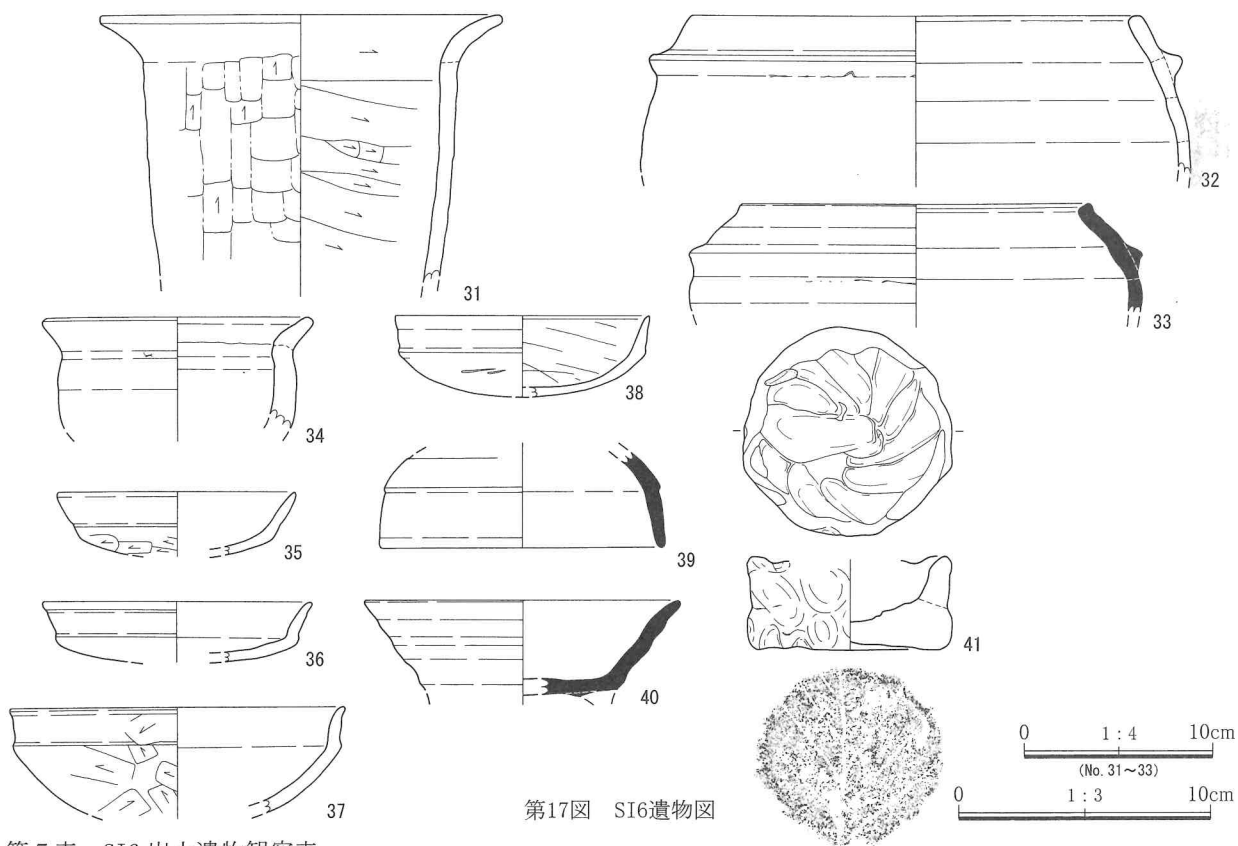


SI6 SPA・B (1-4:SI6、5:SI6カマド、6・7:SI2)

- 1 黄灰色 2.5Y4/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
焼土粒・炭化物粒(ϕ 0.05-0.1cm)を1%含む。
- 2 淡黄色 2.5Y8/3 粘土 シルト質壤土(SiL) 中 中 堅
焼土ブロック(ϕ 1.0-3.0cm)を30%含む。黒褐色(10YR3/1)シルトブロック(ϕ 1.0-5.0cm)を2、3点含む。
- 3 黒褐色～灰黄褐色 10YR3/1～10YR4/2 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟～堅
焼土粒(ϕ 0.5cm)を数点含む。淡黄色(2.5Y8/3)粘土ブロック(ϕ 1.0-2.0cm)を2、3点含む。黄橙色(10YR8/8)粒子(ϕ 0.05cm)を5%含む。
- 4 にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
黄橙色(10YR8/8)粒子(ϕ 0.05cm)を20%含む。にぶい黄褐色(10YR7/4)シルト粒を全体に30%含む。
- 5 黒色 10YR2/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
ローム粒(ϕ 0.05-1.0cm)を10%含む。
- 6 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 一 堅
焼土粒(ϕ 0.1-0.5cm)を10%含む。ローム(黄褐色 10YR8/6)粒(ϕ 1.0cm)を5%含む。炭化物粒(ϕ 0.5cm)を2、3点含む。
- 7 暗灰色 N3/ シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
灰層。

0 1 : 60 2m

第16図 SI6平・断面図



第17図 SI6遺物図

第5表 SI6 出土遺物観察表

No.	種別 器種	①口径 ③器高	②底径 ④残存	⑤焼成 ⑥成形	⑦色調（外面） ⑧色調（内面）	⑨外面調整 ⑩内面調整	備考
31	土師器 長胴甕	① 20.7 ③ 14.2	②— ④口～胴 1/4	⑤酸化 ⑥輪積	⑦明赤褐 2.5YR5/6 ⑧鈍赤褐 5YR4/3	⑨口：ナデ。頸～：ヘラ削り。黒斑。 ⑩口：ナデ。頸～：ヘラナデ。黒斑。	
32	土師質土器 羽釜	① 23.4 ③ 8.35	②— ④口 1/8	⑤酸化 ⑥轆轤	⑦明黄褐 10YR7/6 ⑧鈍黄褐 10YR6/3	⑨ロクロナデ。鏝貼付。 ⑩ロクロナデ。鏝下：炭化物付着。	口縁部裏表黒斑。
33	須恵器 羽釜	① 18.3 ③ 5.7	②— ④口 1/4	⑤還元 ⑥轆轤	⑦灰白 2.5Y8/2 ⑧灰白 2.5Y8/2	⑨ロクロナデ。鏝貼付。 ⑩ロクロナデ。黒斑。	SI6 覆土出土。 No. 11 に酷似。
34	土師器 台付甕	① 10.4 ③ 4.4	②— ④口 1/8	⑤酸化 ⑥轆轤	⑦鈍黄橙 10YR6/3 ⑧黒 10YR1.7/1	⑨ロクロナデ。唇：ヘラナデ。スス付着。 ⑩ヨコナデ。炭素吸着。	底部・台部欠損。 SI6 覆土出土。
35	土師器 模倣杯	① 9.2 ③ 2.5	② 7.6 ④口～底 1/4	⑤酸化 ⑥型起	⑦橙 7.5YR7/6 ⑧黄橙 7.5YR7/8	⑨口：ヨコナデ。下半：ヘラ削り。 ⑩ヨコナデ。	底部欠損。 SI6 覆土出土。
36	土師器 模倣杯	① 10.5 ③ 2.4	② 9.5 ④口～底 1/4	⑤酸化 ⑥型起	⑦橙 7.5YR6/6 ⑧橙 7.5YR6/6	⑨口：ヨコナデ。下半：ヘラ削りのちナデ。 ⑩ヨコナデ。	底部欠損。 SI6 覆土出土。
37	土師器 模倣杯	① 13.1 ③ 4.2	② 12.9 ④口～底 1/6	⑤酸化 ⑥型起	⑦橙 7.5YR6/6 ⑧橙 7.5YR6/6	⑨口：ヨコナデ。下半：ヘラ削り。 ⑩ヨコナデ。	底部欠損。 SI6 覆土出土。
38	土師器 模倣杯	① 10 ③ 3.25	② 9.7 ④口～底 1/3	⑤酸化 ⑥型起	⑦明赤褐 2.5YR5/6 ⑧明赤褐 2.5YR5/6	⑨口：ヨコナデ。下半：ヘラ削りのちナデ。 ⑩強いヘラナデ。	底部欠損。 SI6 覆土出土。
39	須恵器 杯蓋	① 11.1 ③ 3.7	②— ④唇 1/6	⑤還元 ⑥轆轤	⑦灰白 2.5Y8/1 ⑧灰白 2.5Y8/1	⑨唇：ヨコナデ。体：ヘラ削りのちナデ。 ⑩ロクロナデ。	頭部欠損。 SI6 覆土出土。
40	須恵器 碗	① 12.3 ③ 3.8	② 7.5 ④口～底 1/4	⑤還元 ⑥轆轤	⑦灰黄 2.5Y7/2 ⑧浅黄 2.5Y7/3	⑨強いロクロナデ。回転糸切り。高台貼付。 ⑩ロクロナデ。黒斑。	高台欠損。回転方向不明。 SI6 覆土出土。
41	手捏ね土器	① 7.7 ③ 3.7	② 7.2 ④完形 1/1	⑤酸化 ⑥手捏	⑦黄橙 10YR8/6 ⑧黄橙 10YR8/6	⑨指押さえ。底：葉脈痕（刻線）。 ⑩回転指押さえナデ。	SI6 上表土層出土。

7号住居跡 (SI7、第18-20図)

位置 座標 (X=33312、Y=-72650) と座標 (X=33316、Y=-72655) の間に位置する。

形態 主軸は南辺で残存長 215.0cm、方位は E-4°-S。東辺が残存長 77.0cm、方位 N-19°-E。西辺が残存長 41.5cm、方位 N-4°-E。北辺が残存長 159.5cm、方位 E-9°-N。平面形は、東辺の大半が調査区外のため断定できないが、西辺が短い隅丸台形を呈すると推定される。壁は上方が外に向かってやや開き、壁溝は検出されなかった。深さは 2～38cm。ローム層を掘り込んで作られており、掘り方がそのまま床面として利用されている。床面は全体的に硬化している。

施設 カマドは東辺の南東隅寄りで検出された。燃焼部が半分ほど検出されたのみで、大半は調査区外であった。焼土面は認められなかったが、燃焼部から南東隅にかけて灰層が検出された。残存する南袖はⅧ層を掘り出して構築されており、カマドは壁を掘り込んで構築されたと推定される。支脚の抜取痕は認められなかった。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、住居跡の北西隅に楕円形の穴が検出されている。住居跡床面の中央に楕円形の凹みが認められた。

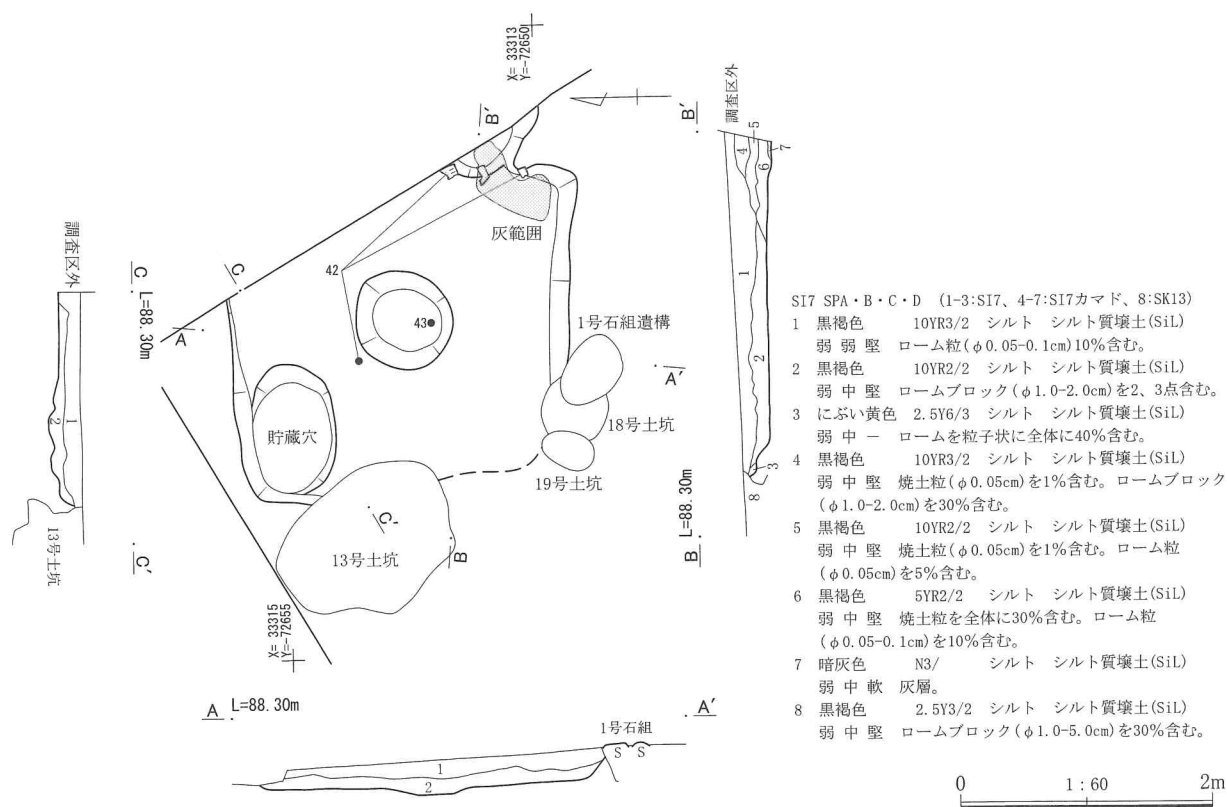
概要 SK13・18・19、SX1 に切られる。覆土は二層に分かれるが、色調と混入物に僅かな違いが認められるだけで、いずれもⅧ層に類似する。遺物は両層からまんべんなく出土している。覆土の土層断面形状は、ほぼ平行であり、人為的な埋め戻しによるものと推定される。

遺物 明確に原位置と認定できないが、カマド前を中心に、甑 (No. 42) が床面直上から散乱した状態で出土している。

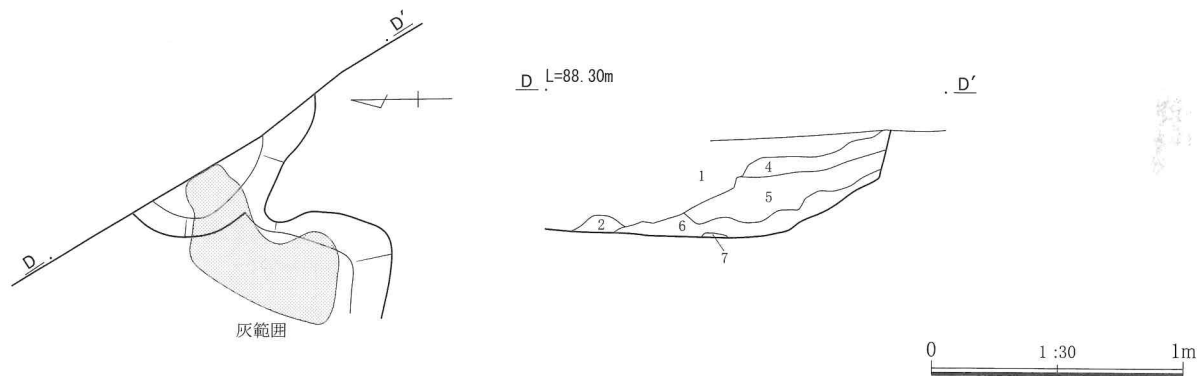
時期 甑 (No. 42) から 11 世紀後半以降*。下限は不明であるが、As-B テフラや As-B 混土を覆土に含まないことから、As-B 降下 (1108 年) 以前と推定される。

備考 貯蔵穴は、覆土層にロームを挟んでいたため、当初床下土坑と思われていたが、整理時に、覆土より出土した土器片が甑 (No. 42) と接合したため、貯蔵穴に変更した。

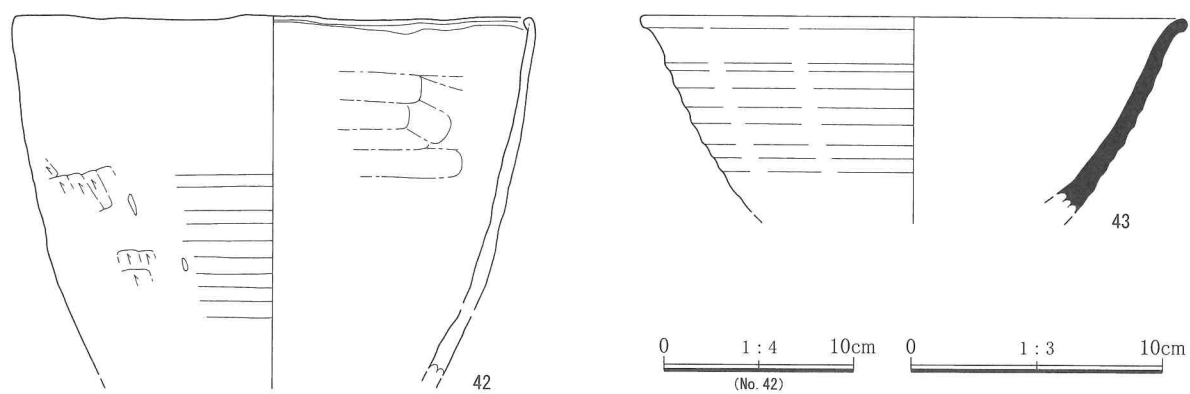
*中沢悟氏のご教示による



第18図 SI7平・断面図



第19図 SI7カマド平・断面図



第20図 SI7遺物図

第6表 SI7 出土遺物観察表

No.	種別 器種	①口径 ③器高	②底径 ④残存	⑤焼成 ⑥成形	⑦色調（外面） ⑧色調（内面）	⑨外面調整 ⑩内面調整	備考
42	甑	① 27.1 ③ 19.1	② — ④ 口～胴 1/4	⑤ 酸化 ⑥ 輪積	⑦ 鈍黄褐 10YR5/3 ⑧ 灰黄褐 10YR5/2	⑨ 口：ヨコナデ。下半：ヘラ削りのちヨコナデ。 ⑩ 唇：内折。口：ヨコナデ。体：強いヘラナデ。	底部が砂底。 直接接合しない破片多数。
43	須恵器 碗	① 21.1 ③ 7.7	② — ④ 口～胴 1/4	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 黒褐 10YR3/1 ⑧ 褐灰 10YR4/1	⑨ ロクロナデ。上半：ヘラナデ。 ⑩ ロクロナデ。底：磨耗痕。	底部・高台欠損。

8号住居跡 (SI8、第21・22図)

位置 座標 (X=33301、Y=-72663) と座標 (X=33306、Y=-72668) の間に位置する。

形態 主軸は北西辺で全長 275.0cm、方位は E-35°-N。北東辺が残存長 189.0cm、方位 N-36°-W。南西辺が残存長 162.0cm、方位 N-30°-W。南東辺は調査区外にあり、規模・方位ともに不明である。平面形状は、南東辺が調査区外のため断定できないが、東西に長い隅丸長方形を呈すると推定される。壁は上方が外に向かってやや開き、壁溝は検出されなかった。深さは 24～55cm。ローム層を掘り込んで作られており、掘り方がそのまま床面として利用されている。床面は全体的に硬化している。

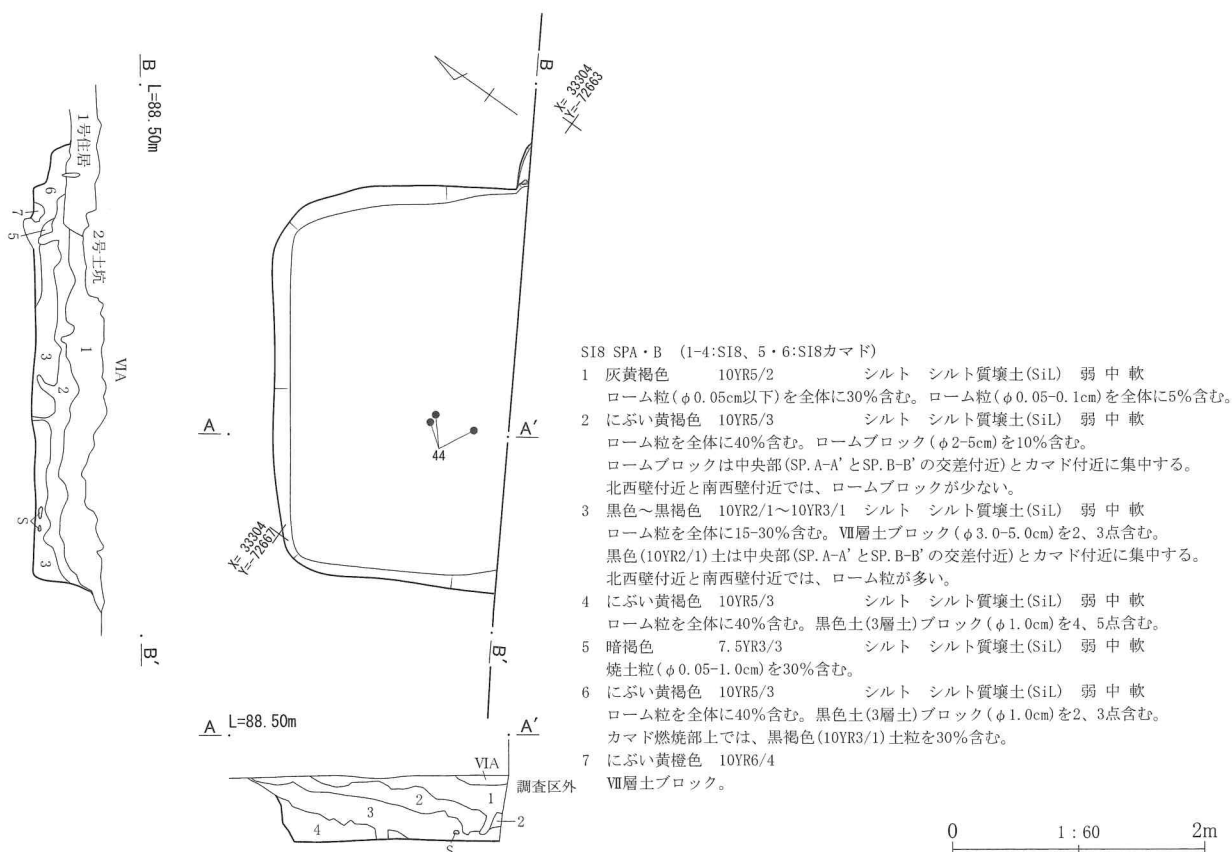
施設 カマドは北東辺の壁際で検出された。北東壁面に掘り込まれており、煙道の一部と思われる。壁等は焼土化していなかったが、周辺の覆土には焼土が含まれている。燃焼部は検出されなかった。煙道部も SI1 に切られていた。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

概要 SK7・8 の底面にて検出された。SI1、SK2・7・8 に切られる。覆土は大きく四層に分かれる。1層は基本土層の VI B 層に類似する。2、4層は VIII 層に、3層は VII 層に類似する。遺物は全般的に出土した。覆土の土層断面形状は、中央が低く周辺が高い、いわゆるレンズ状を呈しており、一見したところ自然堆積によるものと見られるが、VIII 層由来と考えられる層が間層を挟んで堆積しているなど、不自然であり、人為的な埋め戻しによるものと考えたい。

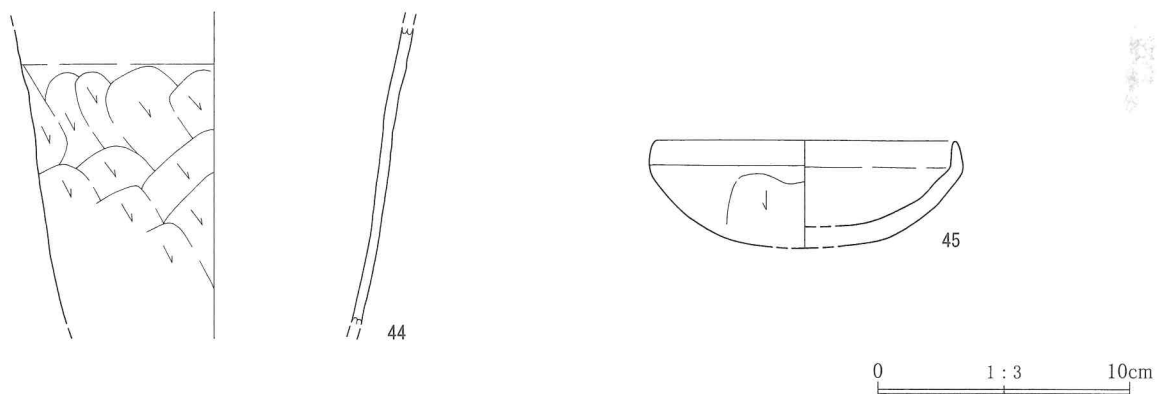
遺物 明確に原位置と認定できないが、住居跡の中央において、甕 (No. 44) が床面直上から散乱した状態で出土している。

時期 断定できないが、遺物から 8～9 世紀ごろと推定される。

備考 当初、SI1 覆土上面に、本遺構のカマド由来と思われる焼土が検出されたため、本遺構が SI1 よりも新しいと考えたが、覆土層断面 SP. B において、SI1 が本遺構を切るという明確な切り合い関係が認められたため、本遺構の方が SI1 よりも古いと判断した。



第21図 SI8平・断面図



第22図 SI8遺物図

第7表 SI8 出土遺物観察表

No.	種別 器種	①口径 ③器高	②底径 ④残存	⑤焼成 ⑥成形	⑦色調（外面） ⑧色調（内面）	⑨外面調整 ⑩内面調整	備考
44	土師器 長胴甕	① 15.6 * ③ 11.7	② 11.6 ** ④ 胴 1/5	⑤ 酸化 ⑥ 輪積	⑦ 鈍褐 7.5YR5/3 ⑧ 橙 7.5YR6/6	⑨ 上半：ナデ。下半：ヘラ削り。 ⑩ ヨコナデ。黒斑。	口縁部・底部欠損。
45	土師器 杯	① 11.8 ③ 4.25	② 12.3 ④ 口～底 1/2	⑤ 酸化 ⑥ 型起	⑦ 黄橙 7.5YR7/8 ⑧ 明赤褐 5YR5/8	⑨ 口：ヨコナデ。下半：ヘラ削りのちナデ。底：黒斑。 ⑩ 屈曲部：指ナデ。他：ヨコナデ。	SI8 覆土出土。

* 最大径

** 最小径

参考文献

- 「遺跡遺物の分類標示方法」（『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈文研、1962）
「平安時代を中心とした土器群について」中沢 悟（『清里・陣場遺跡』県埋文事業団、1982）
「月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群」中沢 悟（『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』県埋文事業団、1986）
『下佐野遺跡Ⅱ地区』県埋文事業団、1986
「奈良・平安時代の土器の編年」坂口 一・三浦京子（『群馬県史研究』24、1986）
「土器の分類と時期設定」桜岡正信（『上野国分僧寺・尼寺中間地域（2）』県埋文事業団、1988）
「足高台を有する土器について」桜岡正信（『上野国分僧寺・尼寺中間地域（2）』県埋文事業団、1988）
『下佐野遺跡』県埋文事業団、1989
「吉井型羽釜について」木津博明（『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』県埋文事業団、1990）

2. 石組遺構

1号石組遺構 (SX1、第23図)

位置 本遺構は、座標 (X=33304、Y=-72666) から E-60°-S 方向 50cm に位置する。

形態 上面は長軸 59.0cm × 短軸 40.0cm。下面は長軸 41.5cm × 短軸 24.5cm。平面形は、上面形、下面形ともに楕円形を呈す。深さ 30cm。断面形は逆台形を呈す。

概要 被熱痕のある砂岩と安山岩が並んだ状態で、SI7 に隣接するに位置で検出された。当初 SI7 のカマドと考えていたが、後に SI7 と切り合う別個の遺構と判明したため、石組遺構とした。被熱痕はあるものの、焼土は確認されなかった。SI7 と SK19 を切る。

遺物 なし。

時期 不明。少なくとも SI7 より新しい。

3. 土坑

調査区全体で多数の土坑が検出されたが、うち 20 基の土坑を調査した。住居跡と切り合うものを優先して調査した。中には SK12・13 のように土坑ではないと判断されたものもあるが、調査した以上報告する。性格を明確にできた土坑はなかったため、言及すべき事項を除いて、形状・規模等の記録は一覧表にまとめて掲載する。

1号土坑 (SK1、第23図) As-B 混土の土坑として検出したが、As-B 混土を除去したところ、覆土 1 層を円形に中央に配する、いわゆる柱痕の残存が認められた。柱穴の可能性があるが、周辺には同様な土坑は検出されなかった。

2号土坑 (SK2、第23図) As-B 混土で埋没するが、V 層上に落ち込みが認められるため、V 層の上面からの掘り込みの可能性がある。但し、V 層中に掘り込みの痕跡は認められなかった。

3・4号土坑 (SK3・4、第23図) 覆土にロームブロックが多く含まれることから、掘削後すぐに埋め戻された可能性がある。ともに規模・形状・長軸方位・覆土がよく似ており、同種の遺構と推定される。

10号土坑 (SK10、第24図) 土層断面では明瞭ではないが、断面形状は、いわゆるフラスコ形を呈している。覆土中から羽釜 (No. 46) が出土しているが、SI2 または 6 からの混入物であると考えられる。

12号土坑 (SK12、第24図) 半裁したところ、断面形と底面が不定形であるため、立木痕として調査を打ち切った。

13号土坑 (SK13、第24図) 半裁したところ、北東壁においてオーバーハングが認められた。覆土層断面では、土層の逆転等倒木痕によく見られる特徴は認められなかったものの、平面形と考え合わせて、倒木痕と認定した。

14号土坑 (SK14、第25図) No. 47 のような大型の遺物を出土する。底面が比較的平坦で、壁が垂直に立ち上がる。大部分は調査区外に遺存するため断定できないが、規模も大きいと推定される。住居跡の可能性があるが、土坑として取り扱った。土層断面では確認できなかったが、中央部分にて、底面を切る攪乱 (土坑か) が存在する。

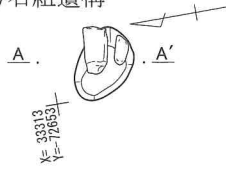
15号土坑 (SK15、第25図) 規模と形状から、柱穴の可能性がある。

16号土坑 (SK16、第25図) 遺物は小さな小破片が 1 点だけである。大部分を試掘トレンチによって切られているが、短いながらも直線状のラインを呈し垂直に立ち上がる壁と、平坦な底面で構成されている。規模、形状が SK14 に類似しており、住居跡の可能性がある。

第8表 土坑一覧表

No.	上面形状 下面	長軸	短軸	断面形	深さ	時期	備考
1	隅丸方形 不整長方形	75.5 33.0	54.0 27.0	逆台形	40	As-B 降下前後か?	柱痕?あり。柱穴か? 覆土最上層が As-B 混土。
2	隅丸長方形 隅丸長方形	59.5 52.5	70.0 62.0	箱形	25-45	As-B 混土形成以降。	覆土2層が As-B 混土。 SI1・8を切る。
3	隅丸長方形 隅丸長方形	100.5 93.5	104.5 88.0	箱形	95	As-B 混土形成以降。	長軸方位 N-50° -W。 SI6・SK5・20を切る。
4	隅丸長方形 隅丸長方形	178.0 169.0	82.0 77.0	箱形	95	As-B 混土形成以降。	長軸方位 N-60° -W。
5	(隅丸長方形) (隅丸長方形)	46.5 43.5	35.5 23.5	箱形	30	As-B 混土形成前後か?	覆土上層に As-B 混土を含む。 SK3に切られ、SI6を切る。
6	楕円形 楕円形	100.5 86.5	66.5 52.0	皿形	15	As-B 混土形成以降。	覆土が As-B 混土。 SI4・SK11を切る。
7	円形 円形	102.0 78.5	93.5 74.0	箱形	20	As-B 混土形成以降。	覆土が As-B 混土。 SI8を切る。
8	円形 円形	104.0 86.0	97.0 80.0	箱形	20	As-B 混土形成以降。	覆土が As-B 混土。 SI8を切る。
9	隅丸方形 隅丸長方形	73.5 59.0	35.5 47.5	逆台形	40-50	As-B 混土形成以降。	覆土が As-B 混土。
10	円形 円形	111.0 111.0	105.0 105.0	台形	40	As-B 混土形成以降。	覆土が As-B 混土。 SI2・6を切る。
11	隅丸長方形 隅丸長方形	160.0 137.0	90.5 65.5	逆台形	40	As-B 混土形成前後か?	長軸方位 N-60° -W。覆土上層に As-B 混土を含む。 SK6に切られ、SI3・4を切る。
12	円形 不定形	65.5 37.5	61.0 17.5	不定形	60	不明。	立木痕。 半裁のみで調査中断。
13	凸形 楕円形	143.5 119.5	127.5 72.0	不定形	55	不明。	倒木痕。倒木方位 S-40° -W。 SI4・7を切る。
14	(三角形) (三角形)	115.0 107.5	59.5 53.0	箱形	10	不明。	住居? SI3を切る。
15	楕円形 楕円形	37.0 20.0	20.5 12.0	V字形	70	不明。	柱穴? SK16を切る。
16	不明 不明	89.0 88.5	23.0 23.0	箱形	15	不明。	住居? SK15に切られる。
17	円形 円形	97.0 79.0	94.5 77.0	箱形	10	As-B 混土形成以降。	覆土が As-B 混土。 SI6を切る。
18	円形 楕円形	22.5 34.5	51.5 26.0	逆台形	20	不明。	SI7・SK19を切る。
19	楕円形 楕円形	42.5 20.0	28.5 15.5	箱形	25	不明。	SK18・SX1に切られ、SI7を切る。
20	(三角形) (三角形)	153.0 131.0	54.0 49.5	逆台形	15	不明。	SK3に切られ、SI6を切る。

1号石組遺構



A L=88.50m A'



SK1 SPA

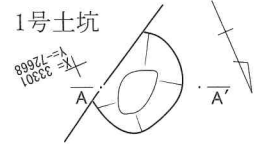
- 1 黒褐色 10YR3/2 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
- 2 黒色 10YR2/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 強 堅

7号住居

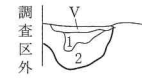
SK1 SPA

- 1 暗灰色 N3/ 粘土質シルト 埴壤土(CL) 弱 中 堅
ローム(淡黄色 2.5Y8/4)粒を5%含む。
- 2 淡黄色 2.5Y8/4 粘土質シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
黄灰色(2.5Y4/1)シルトをまだらに50%含む。

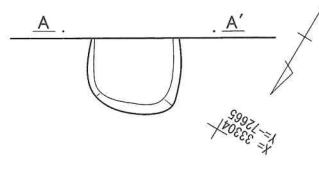
1号土坑



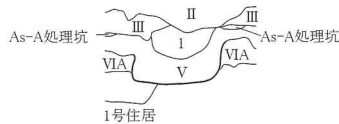
A L=88.50m A'



2号土坑



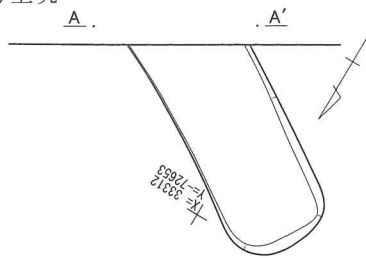
A L=89.00m A'



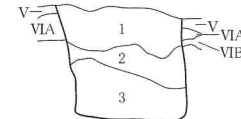
SK2 SPA

- 1 灰白色 2.5Y8/2 砂質シルト 砂壤土(SL) 弱 弱 軟
As-B混土に似た黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルトが、横縞状に混入する。

4号土坑



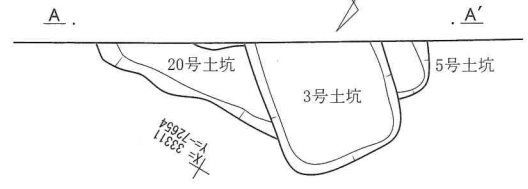
A L=88.50m A'



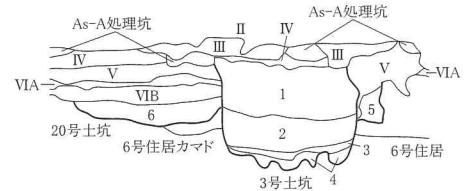
SK4 SPA

- 1 にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト 壤土(L) 弱 中 軟
ロームブロック(φ0.1-2.0cm)を30%含む。
- 2 黒褐色 10YR3/2 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
ロームブロック(φ0.1-2.0cm)を5%含む。
- 3 黒褐色 10YR3/2 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
ロームブロック(φ0.1-2.0cm)を30%含む。

3・5・20号土坑



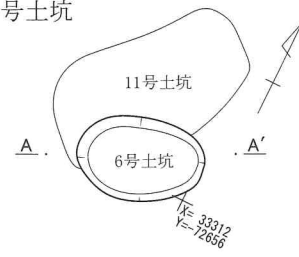
A L=89.00m A'



SK3・5・20 SPA (1-4:SK3, 5:SK5, 6:SK20)

- 1 褐灰色 10YR4/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
ロームブロック(φ0.2-2.0cm)を30%含む。
- 2 褐灰色 10YR4/1 シルト 壤土(L) 弱 中 軟
ロームブロック(φ0.2-3.0cm)を30%含む。但し、やや層状に含まれる。
- 3 黒色 10YR2/1 シルト 壤土(L) 弱 中 堅
ロームブロック(φ0.5cm)を4、5点含む。
- 4 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
- 5 にぶい黄褐色 10YR5/7 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
- 6 黒褐色 10YR3/2 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
黄橙色(10YR8/8)粒子(φ0.05cm)を1%含む。

6号土坑



A L=88.50m A'



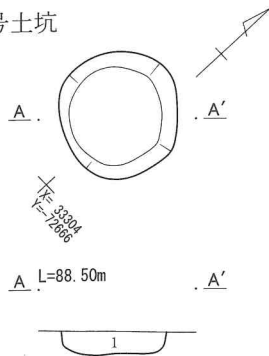
SK6 SPA

- 1 褐灰色 10YR4/1 シルト 壤土(L) 弱 - 軟
As-B混土主体。褐灰色(10YR4/1)粒子(φ0.05-0.1cm)を40%含む。黄橙色(10YR7/8)粒子(φ0.03-0.05cm)を5%含む。

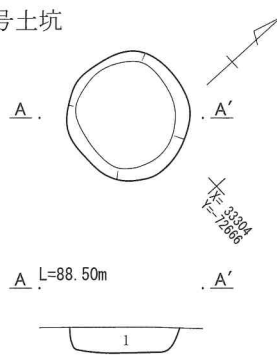
0 1:60 2m

第23図 SX1・SK1-6・20平・断面図

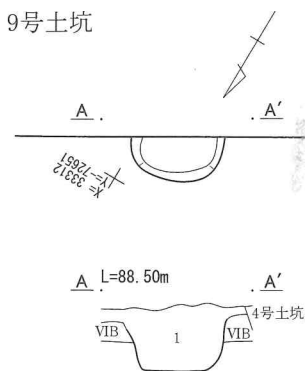
7号土坑



8号土坑



9号土坑



SK7 SPA

1 褐灰色 10YR4/1 シルト 壤土(L) 弱 - 軟
As-B混土主体。褐灰色(10YR 4/1)粒子(ϕ 0.05-
0.1cm)を40%含む。ローム(黄橙色 10YR8/6)ブ
ロックを10%含む。

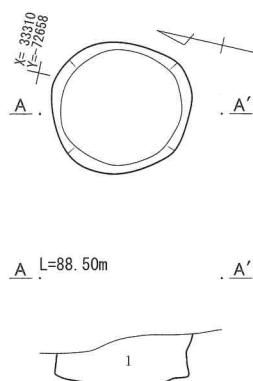
SK8 SPA

1 褐灰色 10YR4/1 シルト 壤土(L) 弱 - 軟
As-B混土主体。褐灰色(10YR4/1)粒子(ϕ 0.05-
0.1cm)を40%含む。ローム(黄橙色 10YR8/6)ブ
ロックを10%含む。

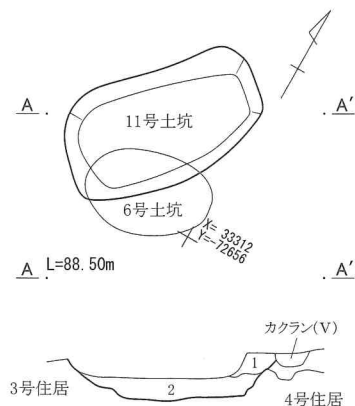
SK9 SPA

1 黄灰色 2.5Y5/1 砂質シルト 壤土(L) 弱 弱 軟
As-B混土主体。ローム(黄橙色 10YR8/6)ブロッ
ク(ϕ 0.5-2.0cm)を10%含む。

10号土坑



11号土坑



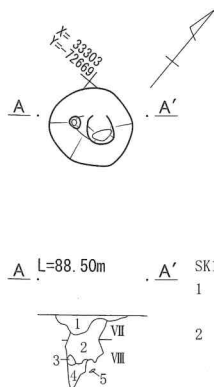
SK10 SPA

1 黄灰色 2.5Y5/1~4/1 砂質シルト 壤土(L) 弱 弱 軟
As-B混土主体。ローム(黄橙色 10YR8/6)ブロック(ϕ 0.5-2.0cm)を
10%含む。上から下に向かって漸移的に色調に黒味を呈する。

SK11 SPA

1 黒褐色 2.5Y3/1 シルト 砂壤土(SL) なし 弱 堅
ローム粒(ϕ 0.5cm)を4、5点含む。同色の砂粒(ϕ 0.1-0.2cm)を30%含む。
2 明黄褐色 10YR7/6 粘土 埴壤土(CL) 弱 弱 堅
黒色(10YR2/1)シルトブロック(ϕ 2.0-10cm)を30%含む。

12号土坑



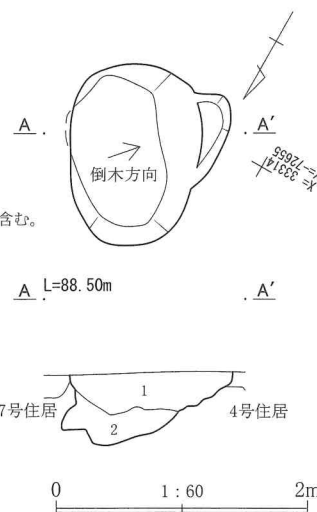
SK13 SPA

1 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
ローム粒(ϕ 0.1-0.2cm)を5%含む。
2 黒褐色 10YR3/2 粘土 埴壤土(CL) 中 強 軟
ローム粒(ϕ 0.1-0.2cm)を5%含む。VII層土ブロック(ϕ 5.0-10cm)を2点含む。

SK12 SPA

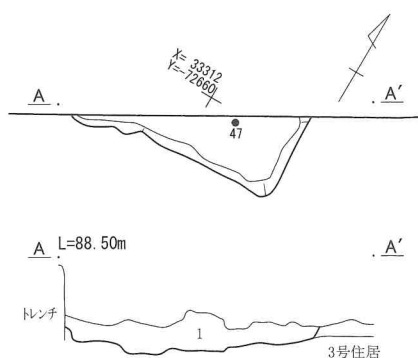
1 黒褐色 10YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 弱 堅
明黄褐色(10YR7/6)粒子(ϕ 0.01-0.03cm)を10-20%含む。粗礫(ϕ 2.0cm)を2点含む。
2 黒色 10YR2/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 弱 軟
ローム(黄橙色 10YR7/8)をブロック(ϕ 2.0-3.0cm)状に2点含む。
同色の砂礫(ϕ 0.1-0.2cm)を数点含む。
3 黄褐色 10YR7/8 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 弱 堅
4 灰黄褐色 10YR5/2 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 弱 軟
ローム粒を全体に40-50%含む。
5 黒色 10YR2/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 弱 堅
ローム粒を全体に30-40%含む。

13号土坑



第24図 SK 7-13・断面図

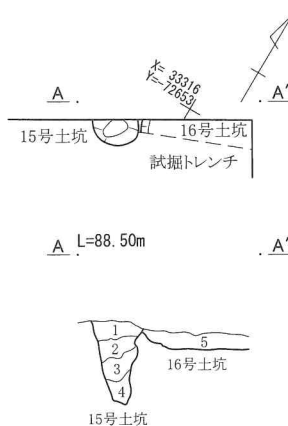
14号土坑



SK14 SPA

- 1 黒褐色 10YR3/2 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
ロームブロック(φ1.0-3.0cm)を10%含む。炭化物粒(φ0.5cm)を1%含む。

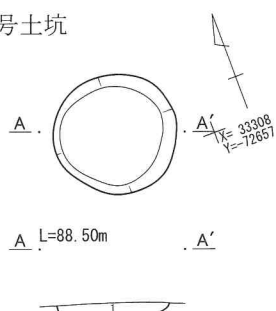
15・16号土坑



SK15・16 SPA

- 1 褐灰色 10YR4/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 弱 堅
ローム粒を全体に10%含む。橙色(5YR6/8)粒子(φ0.1-0.3cm)を2、3点含む。
2 褐灰色 10YR4/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 軟
ローム粒を全体に10%含む。ロームブロック(φ1.0-3.0cm)を30%含む。
3 黒色 10YR2/1 シルト 埴壤土(CL) 弱 中 軟
ローム粒を全体に5%含む。炭化物粒(φ1.0cm)を1点含む。
4 黒色 10YR2/1 粘土 埴壤土(CL) 中 強 軟
ローム粒を全体に5%含む。ロームブロック(φ3.0-5.0cm)を40%含む。
5 褐灰色 10YR4/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 弱 軟
ローム粒を全体に10%含む。橙色(5YR6/8)粒子(φ0.1-0.3cm)を4、5点含む。SK16覆土。

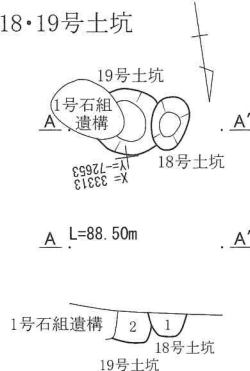
17号土坑



SK17 SPA

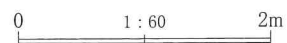
- 1 黄灰色 2.5Y4/1 砂 砂壤土(SL) なし なし 堅
ロームブロック(φ3.0×5.0cm)を1点含む。

18・19号土坑



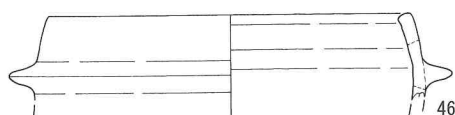
SK18・19 SPA (1:SK18, 2:SK19)

- 1 黒褐色 7.5YR3/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅
焼土粒(φ0.5cm以下)を30%含む。
2 褐灰色 10YR4/1 シルト シルト質壤土(SiL) 弱 中 堅

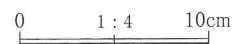
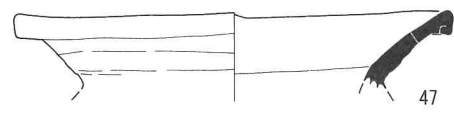


第25図 SK14-19平・断面図

SK10



SK14



第26図 SK10・14遺物図

第9表 SK10・14 出土遺物観察表

No.	種別 器種	①口径 ③器高	②底径 ④残存	⑤焼成 ⑥成形	⑦色調(外面) ⑧色調(内面)	⑨外面調整 ⑩内面調整	備考
46	土師質土器 羽釜	① 19.1 ③ 4.6	② — ④ 口 1/8	⑤ 酸化 ⑥ 轆轤	⑦ 浅黄橙 10YR8/4 ⑧ 浅黄橙 10YR8/4	⑨ ロクロナデ。鏝貼付。唇：ヘラナデ。 ⑩ ヨコナデ。	SK10 覆土出土。
47	須恵器 壺	① 22.8 ③ 4	② — ④ 口 1/4	⑤ 還元 ⑥ 轆轤	⑦ 灰 N6/ ⑧ 黄灰 2.5Y6/1	⑨ 唇・ロ-頸：ヘラナデ。 ⑩ ヨコナデ。	SK14。

VI. まとめ

今回の調査は、工事予定地 1,803 m²のうち、共有道路部分に当たる約 161 m²を調査対象とした。道路部分は、南西から北東方向の幅 5 m 長さ 30 m の直線部分と、南西の現道に接する箇所を隅切りとでラップ形を成している。安全上の理由等により隅切り部分を調査対象外とし、直線部分を調査対象としたため、実際の調査面積は、約 146 m²である。遺構密度は高く、竪穴住居跡 8 軒、石組遺構 1 基、土坑 20 基が検出された。遺物の出土は破片が多く、ほとんど接合しなかったことが特徴的である。縄文土器、埴輪、古式土師器から 9 世紀～10 世紀の土師器、須恵器、11 世紀の土器とバラエティに富んでいるが、出土状況から、SI5 を除き、ほとんどの住居跡は 9～11 世紀におさまると推定される。一方、土坑は、覆土が As-B 混土であるものが多く、As-A 混土層に被覆されることから、大半は 12 世紀以降の中世に相当すると思われる。調査区の形状が狭長なため、竪穴住居跡・土坑のほとんどはその一部のみの調査であったが、住居跡の変遷などに若干の規則性が認められた。

【竪穴住居跡】 竪穴住居跡の形状はいずれも隅丸長方形の範疇に入るものと思われる。SI5 を除き、他の竪穴住居跡は全て調査区の東寄りである（第 4 図）。カマドの方向も、北カマドを有する SI1 を除き、東カマドを有する SI2・4・7、北東カマドを有する SI3・6・8 の 2 グループに分かれる。出土遺物と切り合い関係などから、SI1 は 10 世紀末頃、SI2 は 10 世紀前半、SI3 は 10 世紀前半以降 10 世紀代、SI4 は 9 世紀後半、SI5 は古墳時代、SI6 は 10 世紀前半、SI7 は 11 世紀後半以降 1108 年以前、SI8 は 8～9 世紀に比定されるが、グループ内では年代的にも重ならず、論理的飛躍を許せば、SI4(9 世紀後半)→2(10 世紀前半)→7(11 世紀後半以降 1108 年以前)、SI8(8～9 世紀)→6(10 世紀前半)→3(10 世紀前半以降 10 世紀代)と変遷が伺えよう。但し、SI2 と SI6、3 とが比定される時期が近く、切り合っていることや、SI2 と 3 の規模が比較的小さく似通っているのに対し、SI6 の規模が比較的大きい点など、前述の変遷が成り立つかどうか検討の必要がある。本遺跡に、集落が形成されるのは、SI5 を除き、9 世紀ごろであり、隣接する下佐野遺跡で明らかとなった集落の拡大現象に一致する（第 27 図*）。

* 第 27 図は『下佐野遺跡』第 634 図をもとに付図 -6 に本遺跡全体図を割り付けて作成した。

【石組遺構】 SX1 は、SI7 に隣接する位置に被熱した砂岩と安山岩の丸礫が並んだ状態で検出されたため、当初は SI7 のカマドと考えていたが、隣接部分で SI7 の南壁が検出され、SI7 の東壁にカマドが検出されたため、SX1 と SI7 は別の遺構であると判断した。下部の掘り込みの半裁時に SI7 の壁の一部を切っていることが判明したため、SX1 は SI7 よりも新しい遺構であると判断した。この遺構の機能に関しては、遺物も出土せず、被熱痕があるにもかかわらず焼土が検出されないため、機能を推定する根拠はないのが現状である。

【土坑】 土坑は、As-B 混土を覆土とするものが大半であるため 12 世紀以降と考えられる。下限は不明であるが、As-A や As-A 混土を覆土に含まないため天明三年（1783）よりも前であると考えられる。As-B 混土を覆土とする土坑の平面形は円形が多く、深さも 10～20cm と浅いが、SK9・10 のように 40～50cm と深いものもあり、本来はもっと深いものであった可能性がある。住居跡の可能性のある SK14 を除いて土坑に伴うと認められる遺物は出土していない。大半の土坑は住居跡を切っており、土坑覆土中から出土する遺物は住居跡覆土からの混入と推定される。土坑の分布状況（第 4 図）は住居跡と同様の分布をとっているように見えるが、住居跡を切るものを優先して調査したためであり、SI1 や SI8 の北西側にも土坑状のプランは確認されているため、実際の分布状況は住居跡のそれとは異なる。SI5 周辺は、図化したもの以外にも攪乱があり、土坑の有無は不明である。柱穴と推定されるものは SK1 と SK15 である。SK1 は平面的に柱痕が認められたが、深さが 40cm と柱穴にしては浅いように思われる。SK15 は形状・深さとしても柱穴と考えて良いと思われる。柱痕は認められなかったが、覆土が互層を成しており、裏込めの土を想起させる。いずれも同様の土坑は周囲には認められなかった。SK3・4 はいずれも北西方向を向き規模も似通っており、同様の機能を有する土坑と推定される。遺物は、SI6 を切る SK3 の方は多いが単独の SK4 は少なく、縄文土器片から埴輪片、土師器、須恵器と時期も不特定で破片ばかりであり、混入物と考えられる。現状では機能を推定する根拠に乏しい。覆土に As-B 混土が認められず、V 層を切り、As-A ないし As-A 混土の包含も認められず、As-A 処理坑に切られ、III 層に被覆されるため、年代は As-B 混土層

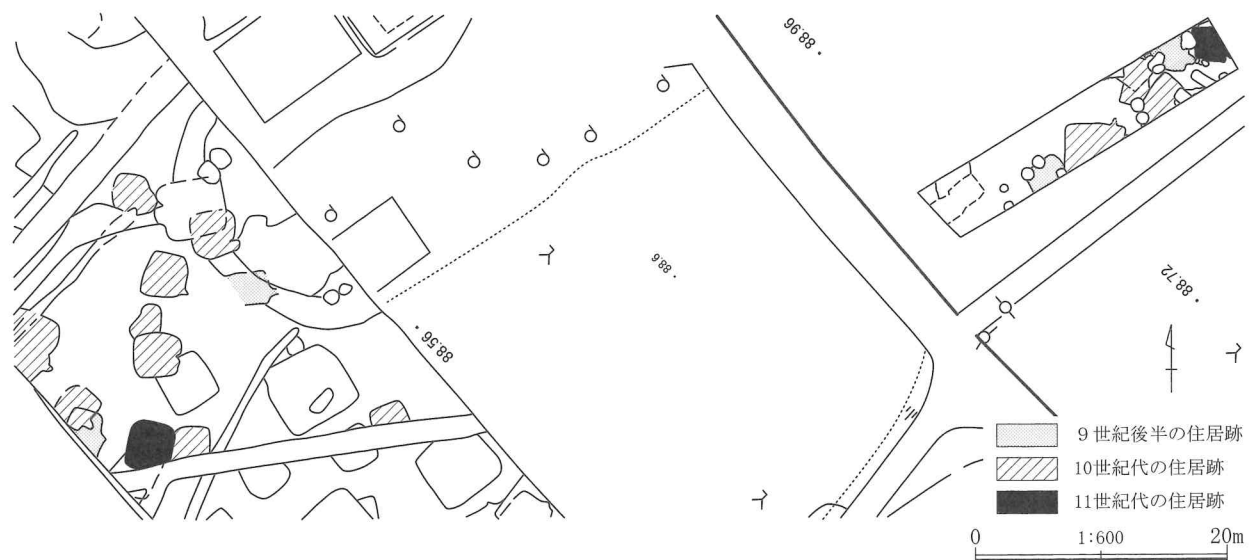
形成後 As-A 降下以前と考えられる。覆土にロームブロックを含みⅧ層まで掘り込んでいることから、掘削後時間を措かずに埋め戻されたと推定される。

【磨り石】 No. 26 は、上から壁面をずり落ちたかのような状況を想起させるように、長い面を SI4 の壁面に密着した状態で、床面直上ではなく覆土層内で出土した。同じ壁面際では、No. 23-25 の須恵器の杯・碗類が、棚から落下したかのような状況を想起させるように、完形ないし完形に近い状態でまとまって出土している。これらの杯・碗類も床面直上ではなく覆土層内の出土である。No. 26 の出土状況は No. 23-25 の出土状況と同様であり、混入ではなく SI4 に伴う遺物であると判断される。No. 26 は二等辺三角形の面を四面持つ四面体であるが、一方の両面は摩擦によって扁平な面となっており、もう一方の両面は摩擦によって一つの凹みを有する。四面に人為的に摩擦を加えられて成形された石製品であることは明らかであるが、平安時代の斯様な石製品を寡聞にして知らない。四面に摩擦面を有するところから便宜上「磨り石」と呼称した。石材は科学的な鑑定を行っていないため正確ではないが、安山岩類であると思われる。もともとの形状は棒状の丸礫、いわゆる川原石であったと思われる、近隣で採取されたものと推測される。全く同じ扁平な両面と一つの凹みを有する両面の組み合わせの四面体の「磨り石」(No. 50) が表土層 (I～VI B 層) より出土しているため、この四面体の石製品は、何らかの作業の結果偶然にできたものではなく、意図的に四面を使い分けることによってできたものであることが判明した。何に、どのように使用していたのかは、現状では不明である。出土状況から平安時代の遺物と判断されるが、斯様な石製品が平安時代に特有なものなのか等の知見は、今後の類例の増加と研究の進展を待たねばならない。

【羽釜】 本遺跡では多数の羽釜が出土している。羽釜の多くは鏝下にロクロナデ痕が認められることから吉井型と推定される。中には、SI1 出土の No. 5 のように鏝下にへら削りの痕跡が認められるものがあり、月夜野型も存在しているようである。東毛型や乗附型があるかどうかは不明である。酸化焰焼成の土師質土器が多い。よく似た No. 11 と No. 33 を除き、ほとんどの羽釜は個体差がある。ほとんど接合しなかったため、口縁部のみで時期の推定を行わざるをえなかったが、下佐野遺跡Ⅵ期 (10 世紀初め) から下佐野遺跡Ⅹ期 (10 世紀末) に相当する時期の羽釜と推定される。

【結語】 調査の結果、本遺跡は下佐野遺跡の集落の範囲内におさまると考えられる。本遺跡における竪穴住居跡の分布状況と南東に位置するもう一つの下佐野一本木遺跡の調査成果から、さらに東に集落は拡大していると考えられ、下佐野遺跡の集落はこれまで考えられてきたよりも大きな集落である可能性が大きいことが判明した。

- 参考文献 『下佐野遺跡Ⅱ地区』県埋文事業団、1986
『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告』高崎市教委、1987
『下佐野遺跡』県埋文事業団、1989



第27図 遺構変遷図



調査区全景 (SW から)



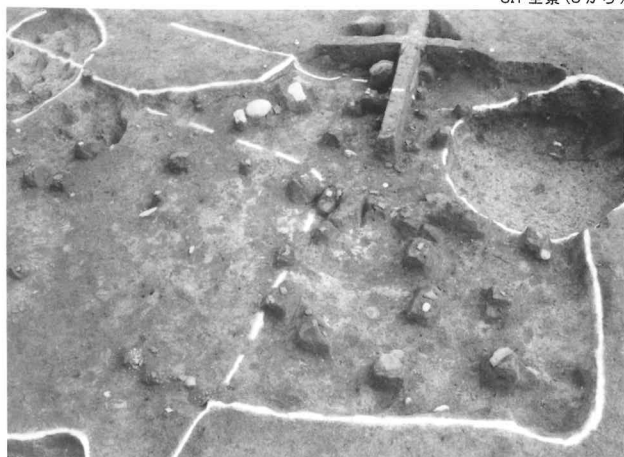
調査区全景 (NE から)



SI1 全景 (S から)



SI1 カマド全景 (S から)



SI2 遺物出土状況 (NW から)



SI3 遺物出土状況 (SW から)



SI3 カマド全景 (SW から)



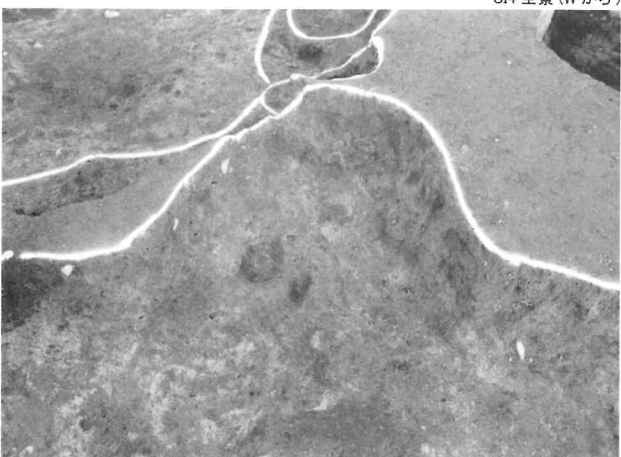
SI3 貯蔵穴遺物出土状況 (N から)



SI4 全景 (W から)



SI4 遺物出土状況 (NW から)



SI4 カマド全景 (W から)



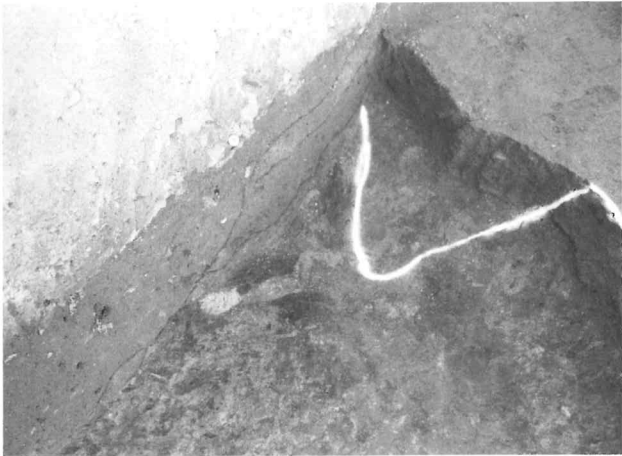
SI5 遺物出土状況 (SW から)



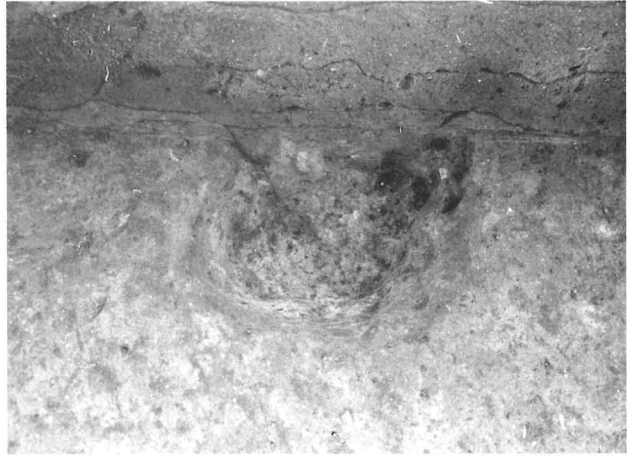
SI7 全景 (W から)



SI7 遺物出土状況 (SW から)



SI7 カマド全景 (W から)



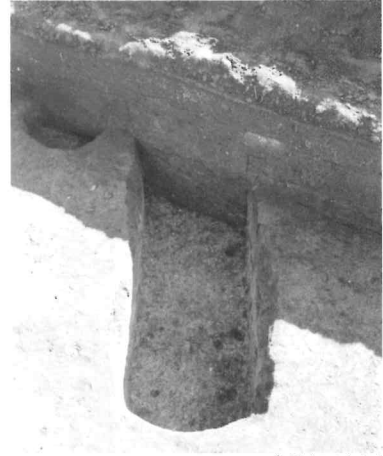
SK1 全景 (NW から)



SI6 全景 (SW から)



SI8 全景 (SW から)



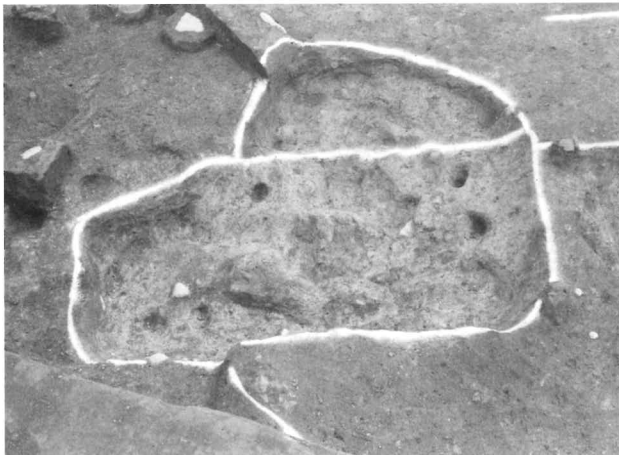
SK4 全景 (NW から)



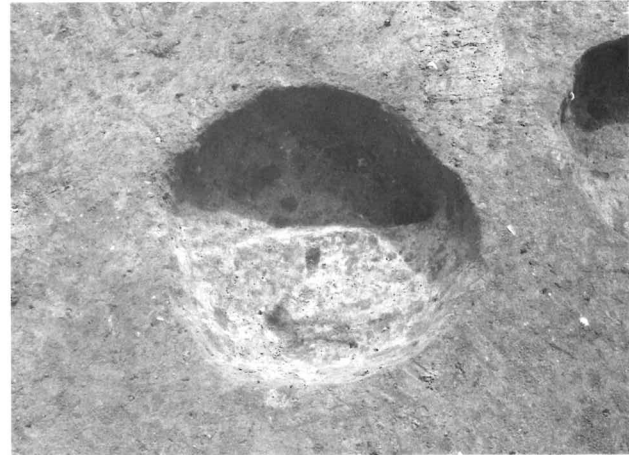
SK2 全景 (NW から)



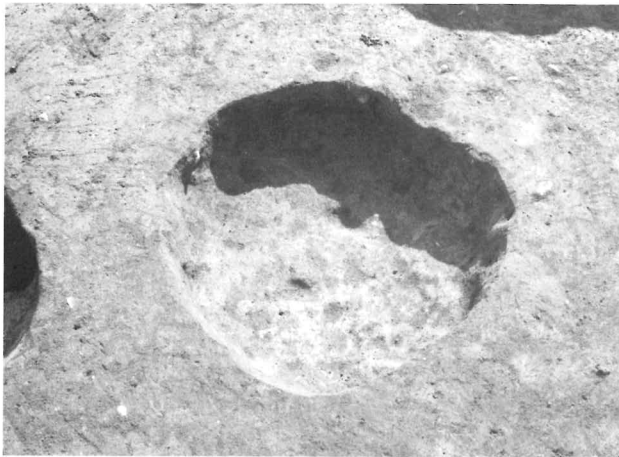
SK3・5 全景 (NW から)



SK6・11 全景 (NW から)



SK7 全景 (NW から)



SK8 全景 (NW から)



SK9 全景 (NW から)



SK10 全景 (SW から)



SK13 セクション (NW から)



SK13 全景 (NW から)



SK14 遺物出土状況 (SE から)



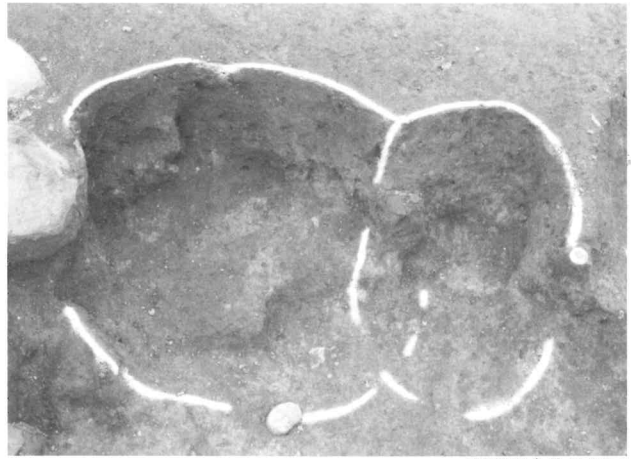
SK15 全景 (SE から)



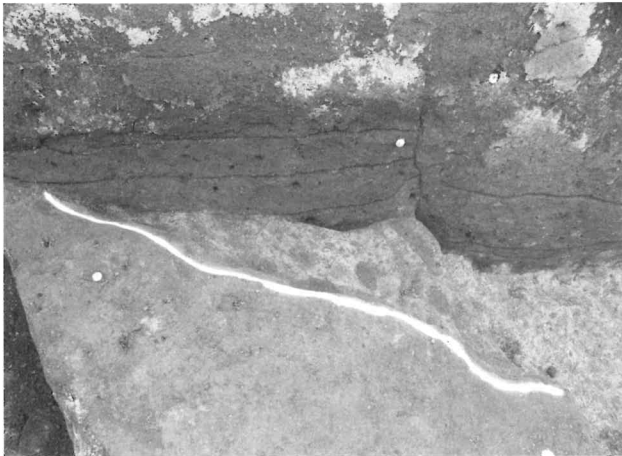
SK16 全景 (SE から)



SK17 全景 (E から)



SK18,19 全景 (N から)



SK20 全景 (NW から)



SX1 全景 (E から)

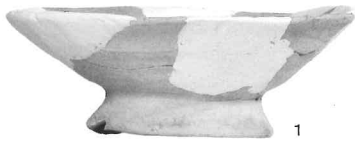


SX1 セクション (W から)

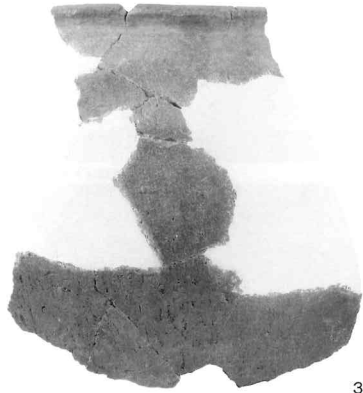


SI1 作業風景 (N から)

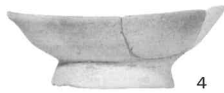
SI1



1



3



4



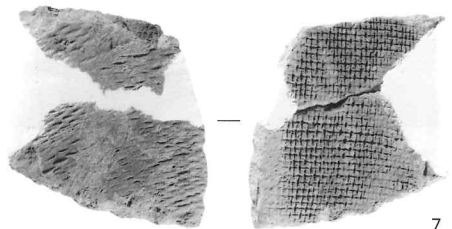
2



5

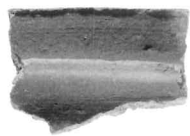


6



7

SI2



8



9



10

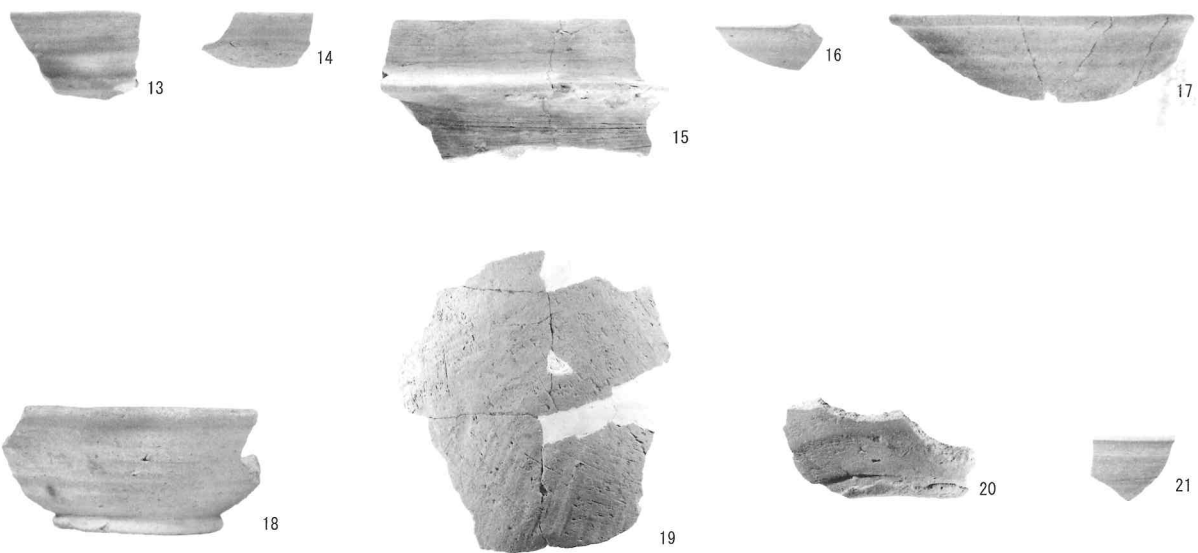


11

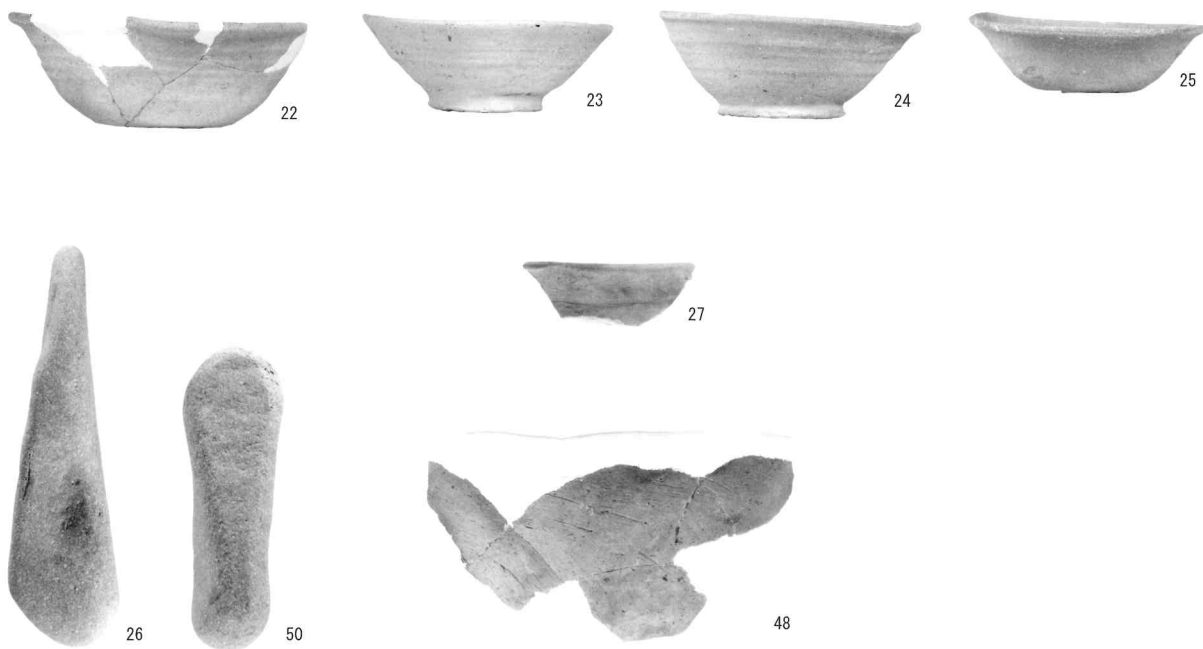


12

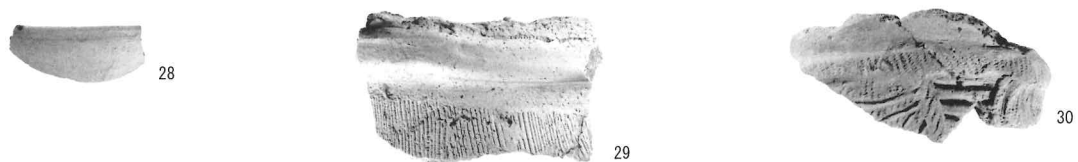
S13



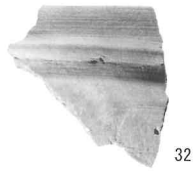
S14



S15



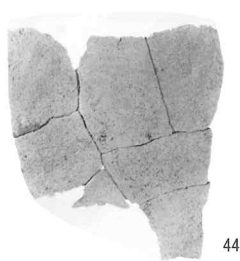
S16



S17



S18



SK10



SK14



発掘調査報告書抄録

ふりがな	な	しもさのいっぽんぎいせき
書名	名	下佐野一本木遺跡
副書名	名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	次	
シリーズ名	名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	号	第 225 集
編著者名	名	斎藤寛方・村上章義
編集機関	関	高崎市教育委員会
所在地	地	〒 370-8501 群馬県高崎市高松町 35 番地 1
発行年月日	日	平成 20 年 5 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
しもさの 下佐野 いっぽんぎ 一本木	たかさきし 高崎市 しもさのまち 下佐野町 ばんち ほか 679 番地 1 他	102024	412	36°17′ 51″	139°1′ 28″	2007. 12. 25 ～ 2008. 02. 01	146 m ²	宅地造成

所収 遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下佐野 一本木 遺跡	集落	古代	竪穴住居跡 8 軒 石組遺構 1 基 土坑 20 基	土師質土器（羽釜・足高高台埴） 土師器（甕・杯・碗） 須恵器（羽釜・甕・壺・碗・杯・杯蓋） 瓦（平瓦・丸瓦） 灰釉陶器（皿・碗・壺） 埴輪（円筒埴輪） 縄文土器（深鉢） 磨り石	

高崎市文化財調査報告書 第225集
下佐野一本木遺跡
―宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査―

平成20年5月23日印刷

平成20年5月30日発行

編集	高崎市教育委員会
発行	高崎市教育委員会
印刷	上毎印刷工業株式会社